

土 淨

號 月 十

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回）日發行
昭和十七年九月廿日印刷納本・昭和十七年十月一日發行

第八卷 第十號



陸海軍 慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓五十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

總本山知恩院門跡
淨土宗 管長
大本山増上寺法主

郁芳隨圓猊下序・増谷文雄著
大島徹水台下

附錄
著作解題
年譜

新刊 行誠上人

◇明治維新の佛教界を第一線で指導した上人を語つて餘りなし◇

郁芳管長猊下の言葉……

福田行誠上人は學ぶかく、徳たかく、文藻ゆたかにして、識見に秀でたお方であつて、ただに我が浄土宗の誇るべき大徳であつたばかりでなく、また近世佛教界において一際ぬきんでた巨匠であられた。い

ま一億心を一つにして聖戰完遂に邁進すべきの時、上人の學徳に接して吾等が信行の策勵に資することは誠に意義深いことである

大島法主白下の言葉……

上人は氣品に於て、氣概に於て、極めて高く、卓犖曠世の風があり、俗韻を厭はれた。維新當時の廢佛毀釋の滔々たる奔流の中にあつても高勁の態度を持せられてをつた。現代が行誠上人の信仰と行續に學ぶべきものは極めて多い。その一斑を窺ふだけでも現在の僧侶はもとより、一般人士にとつて裨益するものあるを疑はない。

著者曰く……

近世第一の高德行誠上人の全傳を執筆するに際し、私の禿筆が上人の高徳を汚すことの少しでも少かれと希ひました。しかし明治の維新の渦中に立つて毅然として佛僧のゆくべき方途を誤らなかつたこの上人の芳躅は、第二の維新といはれる今日の激動の中に立つわたくしどもに、特に教ゆるところ大ならざる筈がありますまい。

B 6 版二百廿八頁

寫眞五葉入り

定價一圓五十錢

送料十二錢

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七番

淨土 十月號 目次

表紙・扉・目次カット……………中島 保

聖典 講義 生死を超えて行く……………大野 法道 (四)

お 十 夜 物 語……………八百谷 順應 (三)

鉦 (かねたゝき) 叩……………吉田 絃二 郎 (一〇)

西 ケ 谷 雜 草……………佐藤 賢 順 (一四)

雜 史 雜 記……………子母澤 寛 (一四)

サタンより科學を 奪はんとするカンチー……………野生司 香雪 (一九)

印 度 特 殊 輯

印 度 の 獨 立 運 動……………堀 公 一 (二三)

印 度 の 風 景……………小林 量 造 (七)

收 容 所 の 教 化……………金田 明 進 (一六)

ハワイ 信 仰 相 談……………中 村 辨 康 (一六)

創作 隣 組 菜 園 碑 徹 雄……………(四)

歌 俳 壇……………岩野喜久代選 (一九)
漫 畫 靜 動 忙 閑……………太田耳動子選 (七)
會 の た よ り……………漫 畫 協 團 (四)
……………(九)
木 炭 も 兵 器……………(一四)
燈 臺 も と 暗 し……………(七)
秀 吉 と 洪 水……………(四七)
梵 鐘 の 目 方……………(三)

法 語 解 説 淨土の信を指標として……………中 村 辨 康 (五)

編 輯 後 記……………(七)



淨土

十月號

我は烏帽子もきぬ法然房なり。黒白をも
知らざる童子の如く、是非も知らざる無智
の者なり。ただ念佛往生を仰いで信ず。釋
迦は念佛して往生せよと勸め、彌陀は念佛
せよ來迎せんと仰せられたり。この一事を
信じて餘事を知らず。

法然上人御法語



保金



聖典
講義

生死を超えて行く

歎 佛 偈 講 義……六……

大 野 法 道

一

願はくば、我れ作佛して聖法王に齊しく

生死を過度して、解脱せずといふことなからむ

歎佛偈がすべて二十偈ある中、之までのところで、佛徳

を讀することが終つて、之からの十偈は、佛徳を求めるこ

とが説かれるのである。これは歎佛偈の中心ともいふべき

大切な所で、その中、初めの五偈（第八偈から十二偈まで）

は、佛の佛たるゆゑん、つまり佛格を求めるのであり、後

の五偈（第十三偈から十七偈まで）は、佛の住みたまふ世

界、即ち淨土を求めるのである。

この歎佛偈は、阿彌陀佛の前身であつた法藏菩薩が、世自在王佛といふ佛に遇つて、佛徳を求められるのである

が、今、その求めるといふことについて、われ／＼の身の
上を眺めて見る。

私達人間は、生れながらに欲を持つてゐるが、それが求
める心の本である。また襁褓を纏ふて母親に抱かれてゐる
幼い頃は、お腹が空けばお乳を求め、眠くなれば寝るだけ
で、すべてが動物のやうに反射的であるが、少年となつて
物心がつき、見るものや聞くことが多くなつてくると、自
分で樂しみを描いて、それを求めるやうになる。しかし少
年時代は何でも樂觀的であるから、求めるにもすべてが無
邪氣であどけなく、欲らしい欲になつてゐないが、青年と
なると漸く世間が廣くなり、求める心も本氣になり、求め
る物も確かになつてくる。それでもまだ樂觀的な所から抜
け切れずに、理想を立てゝ喜んでゐる。それが成年期に入

つて、いざ世の中に打つて出ることゝなれば、生れつきの欲が地に附いて、求める心に根が張つてくるから、萬事を欲から割りだして、苦しんだりまた楽しんだりする。から考へると人の一生は、たゞ欲の發達から出来てゐるといふことになる。

本當に求めるものなしには生きて居られぬ人生であるが、前にも言ふたやうに、身を立てるも欲、身を亡ぼすも欲であることを思へば、求める心の舵を、正しく取ることの大切なのは言ふまでもない。

その舵の取りやうはと問へば、「我れは日本人なり」との自覺を呼び醒すのが本だ、と答へればよいと思ふ。

二

本當に日本人が、求める心に正しく舵を取ることは先祖傳來である。それといふのもこの日本といふ國が外國とは事變り、よろづ世に渝らぬ尊嚴無比なる國體に感激する中に、おのづから無窮の皇運を、翼賛しまつる根本道が見出だされるからであり、またこの國は八紘爲宇といふ絶美の大理想を求める心の大極を持つてゐることゝ、日本人の自覺は、お國を離れぬ我が身の發見であることゝに由り、

お國に盡す我が本分を成し遂げねば止まぬといふ、求める心の純眞なるものを基本として生きて來たからである。

自分だけで勝手に求めるのは、多くの場合、わが儘が混じて不純となり、不成功に終る恐れがある。絶美なるものの感激から湧く求める心は、純潔であるばかりか、一だけ働けば一つ成功あり、二だけ行へば二の成功があるのであつて、かうした求めかたには、不成功とか失敗とかいふ文字を、使用する餘地が絶対にないのは愉快である。

今この數佛偈で、法藏菩薩が佛德を求められるのは、ただ自分で描く理想ではなく、目の前に見る佛德に感激し、「佛も本は凡夫」であるから、勤め勵みさへすれば、かゝる尊い德は必ず得られるといふ、つまり佛から離れぬ我が身の發見から、求める心に勇み立たれたのであつた。

また佛そのものが、立派な德を具へて、じつと止つてゐるものではなく、絶えず衆生の自覺と向上を求めて、その機會を與へつゝ、その場合を作りつゝ、進動せられるのを知つては、その求めたまふ心の尊さに導かれて、いよく佛を求めずには居られなかつたのである。

三

佛格を求めると説く五偈の中で、佛格のありさまを説くのは第八偈だけで、第九偈以下は、求める心の中を打ち割つて説くのである。

まづ第八偈に「作佛」とは成佛のことである。成佛と言へば、何だか死んだ人のことのやうに思ふ人があるかもしれないが、死なずとも成佛の様子は味はへる。味はへるどころではない。今こゝでは法藏菩薩が、師の世自在王佛の佛徳に感激し、「聖法王」としての佛とひとしい徳を具へて、世のため人のために盡したいと求められるのであるから、本當に生きぬく生命を獲得せんとして、「願はくば我れ作佛して」と説かれるのである。その生命とは「生死を過度する」ところのものである。つまり生死を超えて進み行くことである。

生死を超えるといふのは、生きたり死んだり、しなくなくなることはない。石ころか鑛物なら、生き死にはないかも知れぬが、人間や動物であるからには、生涯といふものがあるから、生き死には、どこまでもついて廻る。然らば、どのやうにした所で、生死は超えられぬではないかと、とも思はれるけれども、よく考へてみるとその道はある。

わが身の本分にめざめて、一心に生活するのと、たゞ欲

と二人づれで、忙しい／＼で日を送つてゐるとは、大きな開きがある。たゞ欲だけだと、死んでは何にもならぬから、死を忌み恐れ、それだけ生にしがみつく。之では生死に縛られたも同様で、窮屈なこと此上なく、折角の人生に何のゆとりもないことになる。それでも生きてゐる間は、一生懸命に働くから、ぼんやりと一生を終る連中よりは、い、お國のために若干の貢獻する所がないではないが、追ひ廻されてばかりゐるから出るべき本當の力は出て來ないし、死んでしまへばそれきりである。

ところが、わが身の本分にめざめると、たゞ一心に進むことがあるのみで、生き死には問題ではない。生ある間は生きてゆくが、死が來れば死んでゆく。いかなる場面でも、置かれるまゝに一心に進んでゆく。この人は、たゞ本分を成し遂げることが何よりの楽しみで、生よりも死よりも、一心が大切だからである。

生死を突き貫く、一心の楽しみを持つほど、大なる幸福はないであらう。

四

生死を超えた一心を、實證するのは皇軍の將士である。

命令一々、敵陣攻撃に立ち上つた勇士は、君國にさげすみけず本分に徹しつゝ、たゞ一心に進む外には何物もなく、生とか死とかの分別心、その他の餘念、雜念の割りこむ餘地もあらばこそである。

こゝにこそ、人間の本當の力が出るのであり、無敵皇軍の強さがあるのである。

生死を超えて行く一心の尊さは、筆にも書けず、言葉にも表せない。たゞ頭の下るのを覚えるばかりである。

過日も、南方の捕虜の感想のことが放送されたが、その中に、彼等の曰く、「我々は力の及ぶかぎり戦つた。そして最早や何とも致し方ない所まで来て、捕虜となつたのである。今現に捕虜となつてゐることが、それを證明してゐる」と言つてゐた。外國兵にはかうした事は普通なのであらうが、之では皇軍の前に敵らしい敵となり得ないのも無理はない。つまり彼等が、生死を超えて行く力と尊さを知らぬからである。

生死を超えて行く姿は、皇軍將士に的確に見られるが、一億國民にもその道はある。

日本人としての己れの本分にめざめ、お國に盡す一心にさへ立てば、いつでも、何人も、生死を超える道は具はつ

燈臺もと暗し

子蟹が澤山に遊んでゐるのを母蟹がみて云ひました。

「お前たちはなぜそんな歩きかたをするのですか。横へ横へとはかり歩き廻つて、第一見つともないではありませんか。」

と叱りました。すると子蟹が困つた顔をして

「だつて私達は横に歩くしか歩き方を知らないのだよ。ぢや教えて下さい」

と云ひました。

「よろしい、では教へませう。よく御覽なさいよ、こうして歩くのです」

と親蟹が、向ふの方に見當をつけてから真直ぐに歩かうとしました。しかし何うしても右へはつた

り左にはつたりしてうまくゆきません。その様子がいかにもおかしかつたので子蟹たちは手をうつて笑ひ出し、

「お母さん、お母さんがまつすぐに歩けるやうになつてから私達に教へて下さい」

と云ひました。

目は自分の目を見ることが出来ません。また指は自分の指をさし示すことが出来ません。諺に「燈臺もと暗し」と云ひます。目を開けて歩いてゐるのによくころびます。とかく自分で自分の行ひが判らないのです。「他人のふり見て、我がふりなほせ」といふやうに、他人の間違ひをみたなら、これこそ自分への教訓であると思つて直しませう。笑つてなどゐたら次には自分が笑はれます。

てゐる。

筆者が學生時代に、教育を受けた先生に梵語學の世界的泰斗たる方があつた。平素から全く研究三昧の一心に立つて居られ、純潔な風格に、學生達はいづれも崇敬の念をささげたのであつたが、その先生の葬儀の際、位牌の前に、書齋で専心研究中の寫眞を立てゝあつた。之を拜んだ途端に、「皆さんで葬儀をして下さるのか、有難う。私はいつもの通り好きな勉強を續けます」と、ありし日の溫容で、ささやかれるのが聞えたやうな氣がした。そして、立派に生死を超えて、永遠の生命に生きて居られる先生を偲んだのであつた。

五

生死を超えるとは、生き死にを輕んじたり、無視したりすることゝは違ふ。人生に取つて、生きると死ぬほど、大事なことではないのであるから、妄りに生き妄りに死ぬやうなことなく、生くべき時にしつかり生き、死ぬべき時に本當に死ぬやうに、心がけるのが大切だと思ふ。

法然上人は、宗教的にその道を教へて、生らば念佛の功つもあり

死なば淨土へまいりなん

とてもかくてもこの身には

思ひわづらふことぞなき

と思ひぬれば、死生ともにわづらひなし

と申された。念佛申して生を踐みしめ、命終つて淨土へゆ

くと、はつきり生死を見つめつゝしかも何の煩ひもなく進

んで行く。こゝに淨土の信仰の、生死を超えた姿がある。

やはり之も、阿彌陀佛を信する一心から來るのである。

第四句に「解脱」とあるのも、生死を超えることの外で

はない。生死を解決して、その煩ひの苦から脱れることで

ある。生死は、人の頭で考へて理論を構成することを、い

くら繰り返しても解決のつくものではない。信に立つて一

心に生活する所に、おのづからなる解決の道が開かれるで

あらう。

大東亞戰爭は「一億一心」で完遂せらるべきである。こ

の「一億一心」といふ言葉は、一億國民が同じ一つの心に

なつてしまふことであるがそれを裏から實質的に眺めると、

日本人が己れの本分にめざめて、一心に立つことである。生死を超えてゆくと、底しれぬ力が、むく／＼と

むくり上るであらう。

會のたより

陸軍大臣感謝狀を
更に二通授與され

合計卅四通に達す

明るく正しく感謝に生きたる職域奉公に邁進したいと精進する本會に對し前々號本欄に記載の通り陸海軍大臣から感謝狀が授與され、また病院長から謝狀がよせられてゐますが、更にまた陸軍大臣から感謝狀二通を授與されました。かくて事變以來本會に授與された陸海軍大臣の感謝は實に三十四通の多きに達しました。

特志寄附者芳名

左記の通り本會活動資金にと特志寄附下されました。

二圓 大連市天神町四〇

明照寺内 瀧本瑞麟殿

◇われわれの使命のますます重大なるを痛感いたしをりますすが、淨土教獨特の教理を時代に即して具體的に解説いたし、その要點を鮮明に御指示ありたく希望いたします。(鹿兒島市外谷山町志岐眞成) ◇去る六日に當方面委員を代表して世田谷區海軍病院に恩間に参りましたが、その折私個人として貴誌「淨土」を差し上げました。すると病院當局からも將兵方からも大變感謝され、誠によい思ひつきであると同道の委員からも喜ばれて、面目を施しました。(本所區横川橋一ノ二八、藤井龍雄)

◇貴會もいよく御隆盛の由、小生もおかげで元氣で御奉公致してゐます。眞野先生には子弟教育並に鐵仰會その他で御多忙のことゝ推察いたします。先生にはくれぐれも御自愛の程願ひ上げます。(北支東第二九二五部隊阿部隊村岡和男)

◇毎月淨土を通して教導き下されお念佛の有難さの少しづつでも判るやうになり、いつも朗かに感謝の目を送つてゐます。この喜びは例へやうもありません。私は子も孫も海軍々人として御奉公致してをります故、私獨り片田舎で佛さまにお給仕してゐます。常に御佛が身近にをられると思へば寂しくなく暮してゐます。有難き仕合せに存じます。(茨城縣阿見村阿見西郷加藤登志)

◇自分は常々立派な信念の人となりたいて考へて若干の實行目標をたて、進みますが、どうしてもその目標に達せぬ内に終つてしまひ自分でも腹がたつこともあり全くなれながら情ないと思つてゐ

ます。あらゆる惡魔を滅ぼして一意勉學に進みたいと思ひます。何卒宜しく御指導の程を願ひます。(麻布區綱代町高橋正敏)

新刊案内

淨土宗管長郁芳國圖貌下序
増上寺法主大島徹水台下序
増谷文雄著

行誡上人

B 6 版二百二十八頁寫眞五葉入り

定價 一圓五十錢 送料 十二錢

明治維新の多難な佛教界を指導した上人の言行は現代人にも尙多くの教へを與へてゐる。淨土宗ばかりでなく佛教界に「獨り行誡あるのみ」といはれた偉人を描き出して餘りないもの。會員各位の一讀をお奨めします。

發行所 法然上人鐵仰會

鉦 かね叩 たたき

家をめぐりてこほろぎが鳴く。数日前から鉦叩や草
ひばりも鳴きはじめた。

裏の畑に出て空を仰げば星の光りも近年になく冴え
て見える。燈火管制のおかげである。

昔は星の空を仰ぎ、庭の更けるまで蟲の音を聴いて
歩いたこともあつた。そのころは星を見ることが、蟲
の音を聴くことも楽しみであつた。

このころは夜空を仰ぐことはむしろ苦痛になつて來
た。蟲の音を聴くには耐へないといふ氣持ちがわいて
來た。早く戸をとぎしてたゞ獨り香を焚くか、書を讀
むか、そして疲れ果てゝぐつすり眠ることばかり冀ふ
やうな氣持ちになつた。

星や蟲の音を尊く思ひ、なつかしく思ふ心は昔より
もはるかにこまやかであり、深くもなつて來た。それ

吉田 絃 二 郎

だけに夜の空を仰ぎながら蟲の音を聴いてゐるやうな
ことは耐へがたくなつた。過去の思ひ出が餘りに多く
秋の夜空や蟲の音に結びついてゐるからであらう。

×

戸をとぎして靜かに庭の蟲の音を聴いてゐると、青
年のころとはちがつた感じで心にひびいて來る。

この蟲の音を聴くのも今年かぎりであらうか。と、
そんなことを考へると、今までになくなつたらしいもの
が感じられる。夜毎の蟲の音であるが、出來るだけ叮
嚙に聴いて置かうといふ氣になる。

青年時代には來年の秋もまた蟲の音を聴くといふ自
信を持つてゐるために、蟲の音を大切に聴くことをし
なかつた。

わたくしたちの年配になれば秋が來るごとに、今年



かぎりの秋かも知れぬと思ふので、蟲の音一つ、木の葉の落つる音一つにも心を惹かされた。もつともつと大切に蟲の音、落葉の音を聽いて置かうと思ふ。

さう思ひながら生きてゐると蟲の聲一つでも昔とはちがつたものを持つてゐることに氣付く。

一日一日の生活の味、生存の深さといふものがずつと増して来る。一日生きてゐるだけでまことに無量無邊の大慈悲であることに氣付く。

もし人間が死んで淨土に行けるものとしたら、こんなありがたいことはない。しかしそれはあまりに勿體なさ過ぎる。わたくしは現世のありがたさだけで充分だと思ふ。現世の悲しみだけで充分だと思ふ。わたくしは死んだら、いつまでもそつと眠らして置いてもらひたいと思ふ。永遠に土となり、石となつてゐたいと思ふ。その代りにわたくしは生きてゐるかぎりすゐぶん働きもし、悲しみにも、寂しさにもじつと耐へ忍んでゆかうと思ふ。

ミケランゼロは九十年の生涯を孤獨の裡に力強く生き貫いて行つた。そしてあれほどの大きな仕事を遺して行つた。ステイン禮拜堂の仕事だけでも、普通の

人間の一生も二生もの大事業である。かれは三年或ひは四年の間、水と麵麴のみで夜も晝も描きつゞけた。休息の室にはたゞ一臺の寢床があるだけで、數人の弟子と交る交るその寢床にもぐり込み、眼がさむれば筆を執つて精進した。そのためにかれは十四の持病に取りつかれたと傳へられてゐる。

瀧澤馬琴の八十二年の生涯も亦苦惱の生涯であつた。七十餘にして盲目となり一代の傑作八犬傳を書き上げた苦心を察すれば、やゝもすれば弱氣に墮せんとする凡夫の心に勇氣をあたへられる。

死ぬることは天なり、命なりである。さびしくはあるが、恐ろしいとは思はぬ。もし天命によりてゆるされるならば生きて、生き甲斐のある仕事だけは遺して死にたいと思ふ。しかし左様な考へを持つことがすでに執着であるならば、いつでも捨てゝも残り惜しいとは思はない。

×

叮嚀に人生を生きてゆくといふ心は一粒の米をも押しいたゞいて味はふことからはじまる。

茶を喫する心持ちは嚴肅、寂び、感謝、といふやう



ないろいろ複雑な心理を伴うてゐる。きちんと端坐して一碗の茶をいたゞく心持ちはゆかしくもあり、厳かでもある。

だが、それほど心の構へをして坐つても、ともすれば茶の味を取り逃がすことがある。一碗の茶を味ふことの難きをつくづく思ふ。

遠い田舎の友人から角砂糖を一箱送つてもらつた。たゞ一顆の角砂糖も現在の生活にとつては珍品であり、貴重品である。たまゝの來客に角砂糖を入れて紅茶をお上げするに、時として喫みさしたるまゝに取り残されるのを見出すことがある。主としてはさびしい氣持ちになる。

人生或ひは自然界を通してわたくしたちに恵まれてゐる恩恵といふものは無邊大である。しかもわたくしたちはこの自然界の大恩恵を極めて不用意のまゝに取り残して行つてしまふ。神佛の御心はさぞお寂しいことであらう。

賦へられた命を粗末にしてはならぬ。與へられた人生の一日をながしにしてはならぬ。客人にさゝぐ一碗の茶には萬斛の心をこめなければならぬ。さゝ

けられた一碗の茶には無量盡の心がこめられてゐることを知らなければならぬ。お互にそれだけの心を抱いて人と交はれば現世は淨土であり、人はみな菩薩である。死後土になり、石になつてもすこしも寂しいとは思はぬ。

×

木のてつべんで囀る頬白はいつでも「一筆啓上仕り候」と鳴き、いかるは「蓑笠着い」と鳴くと教へられた。夏の間のわたくしは信濃の山にゐて黎明から夕暮まで同じ鳥の聲を聴いて暮らした。

その間にわたくしは一つの疑ひを抱くやうになつた。或ひは一つの発見といつた方がいゝかも知れない。それはちよつと聞いたところではいつも同じ一筆啓上であり、蓑笠着いであるが、時により音感がちがつてゐるやうに思はれる。山の小鳥にしてもうれしい時もあらうし、寂しい時もあらう。同じ一筆啓上にしても、その音じめに織りこまれる小鳥の感情には明暗が伴ふであらう。無論聴く人の主観にも依ることでもあらうが、あながちさうばかりとも思へない。小鳥の聲の裡にもそのをりをりの小鳥の心境が反映してゐる



やうに思はれる。

叮嚀な心構へをもつて自然に對すれば今まで單調なものとして、無意味なものとして看のがしてゐたところにも複雑微妙なものが動いてゐることに氣づく。

ことは裏庭の柚子も相當に可憐な實を結んでゐる。今までは落ちるにまかせて捨てゝゐたが、この秋は朝ごとに一顆づゝいたゞいては食膳に供へることにしよう。壞血病には何よりの藥餌であらう。昨年あたりから三つ四つの持病を患ふたために、最初は病氣が苦になつたが、このごろは病態が常態だとあきらめたら、幾らか病も苦にならぬやうになつた。

×

これもこの夏の信濃の山の生活での経験であつたが、山は寒く、霧の深い日がつゞいて、八月も末になれば朝毎に渡り鳥の群があわたゞしげに飛んで行つた。

わたくしは不圖或る夜、眠りからさめて戸外のもの音に耳を傾けてゐた。遠くから響いて来る鉦の音に氣付いた。たしかに半丁も一丁も先きから靜かに近づいて来る鉦の音である。戸外には霧につゝまれた月光が

漂うてゐた。誰がこの眞夜中の山中に鉦を叩いてゐるのであらう。ちよつと無氣味にさへ感じた。

しかしそのわびしい聲が蟲の音であることに氣付いたのは翌夜のことであつた。おそらくそれは鉦叩きの一種であらうが、武藏野あたりで聴く鉦叩きに比べて、すつと間が延び、すつと低く、消え入らんばかりに、遠く、幽かに、幾倍のあはれをこめたものである。わたくしたちが子供のころ聴かされた幽霊の鉦を聯想させるものである。

中村 辨康著 日常勤行式講讚 一・五〇

山本 幹夫著 法然佛教とわ國體思想 二・二〇

中里 介山著 法然上人傳 二・六〇

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七番

西ヶ谷雜草

無能上人のことなど

佐藤賢順

日一日と快方にむかつてくるにつれて、醫者からも新聞、雜誌、それから一般書籍といふ順で、だんだんと讀書のお許しが出るやうになつた。

是非讀みたいと思つてゐた本は、肩のこらない娛樂雜誌や氣輕に讀める文學書ではなく、宗教に關する本であつた。日頃は俗事の忙しさに追はれて、なかなか落着いては讀めない宗學に關する古典を、それも二祖三代あたりの古い所のものを、自分が今、病床にあつて、願ひ求めてゐるものと照し合せて、泌み通るやうな心持で讀んでみたいと思つた。活字に復刻した新しい本ではなく、和紙の古びた匂ひと紙魚が地圖のやうに食ひ荒した跡

とが懷しまれる古版本の方が、書體や挿繪から受ける感覺がはつきりしてかういふ時の心持にふさはしいので、黒光りのする古い本箱からそんな本を引き出してきては、食ひ入るやうに讀み耽つた。六、七百年を経た古典ではあるが、かうした要求を持つて讀んでゐると、そこには何か強く生きてゐるものがあつて、長い月日の隔りを撤して今と昔を生きた紐帶で結びつける。

私は長いこと歐米の思想の遍歴を續けてゐた。しかしそれは珍らしいもの、新しいものの、一歩先んじて知ることによつて他人の機先を制するもの、を求める旅ではあつても、永遠の憩ひの家を求める旅ではない。それは

木炭も兵器

戰時下にあたつて鐵や銅やその他かういつた種類のものが大切なことは判りきつてゐるが、木炭が非常に重要なものになつてゐることをよく知らぬ人があるやうだ。なるほど戰爭前には燃料といへばガス、石炭であり、電氣の使用がさかになつてくるといふわけであつて、これらを相手に木炭は賣れゆきが苦しくなつて、業者は賣捌きに苦心したものであつた。ところが今では木炭をどし／＼増産し、他方ではせいぜい節約しても末だ不足であるといふ有様になつてゐる。例へば昭和八年には木炭は五億八千萬貫で十分用が足りたものが、昭和十五年には七億五千萬貫が要つたといふわけで、實に二割九分も増加してゐることになる。このやうに戰爭になつて木炭の需要が急激に増加したにはもとより理由のあることで、その理由にもいろいろとある。

私の思想を見直すための手段ではあるが、私はその中で安らかに憩ふことはできない。他國の文化、他の國の思想といふものは、早く言へば、結局は解らないといふのが本當である。それは如何に難しい理屈であらうと理屈としては解るであらうし、また先端を切る最新の知識として、語つて人を抑へることもできるであらう。が結局は解らないのである。

解らないといふのは客體的には解つても主體的には解らないといふことを指すのであつて、それが私どもの持つ一種の宿命とも言へよう。思想は必ずその背景として、國土を持ち歴史を持ち生活を持つ。脈々として生動する傳統の鼓動なしには如何に努力しても、他國の思想は理解できない。これに反して自國の、しかも同じ法流の古聖の信仰や思想は、有難いことに、長らく思想の遍歴を續けてゐたものにとつても、還り來てその懐に入りさへすれば、すぐそれと一つになることができる。他國の國の歴史や文化ばかり勉強して

ゐたものが、たまたま古事記や萬葉集を讀んで、覺えるところの感慨もまたこれと同じであらう。

然し宗學に關するものは、教義として組織立てられてゐるために、信仰上の血と肉とか切り離されてゐるので、性急に手取り早く間に合ふものを求める病人には、正直のところまだごちなき、もどかしさが感ぜられる。

そこへゆくと、往生傳、妙好人傳、行業記のやうな、古聖賢なり往生人なりの生涯の行業を傳へたものは、そつくりそのまゝそれが私どもの手本になり規矩になるので、その一つの生活記録は特別の親しさを以つて讀まれる。

もしたまたま病床に臥すやうなことがあつたら、講談や小説など讀み耽つて愛慾を攪拌して、生きることのいらだたしさに油を注ぐよりは、聖者傳、往生人傳を繙いて和らぎと静けさを欣ぶべきである。

○

先づ人口が増えればそれだけ多く木炭を使ふわけである。それにガス、電氣、石炭といづれも窮屈になつてゐるので、勢ひ木炭を多く消費することになる。それに木炭自動車の數がふえたので、これに使ふ分も可成りの量にのぼる。これらの方面だけでも大きな原因となつてゐる。しかしほんとに消費方面で増加したのは工業用の木炭消費である。

それなら何に用ふるかといへば、これ亦各種のものがあつたがその主なるものを擧げれば先づ砂鐵事業がある。砂鐵事業には勿論電氣や石炭も用ひるが、これらのものより木炭をたいて鐵を熔した方がよいのである。即ち木炭だと鐵本來の性質を失はず、質がよく、ねばりが強くて、刀などにしても切味がよいと云はれる。これと同様なことが鋼鐵にも云はれるのであり、これら鐵の目下重要なことは云ふまでもない。従つて製鐵と木炭とは切り離すことの出來ぬ關係にあるのである。この外に、ス・フを造る時に入用な二硫化炭素を

その人と直接に觸れる親しさから、讀み漁つた幾種かの往生傳のうちでも、特に咬るもののあつたのは、好譽寶洲の『無能上人行業記』である。これは享保六年に刊行されてゐる。享保六年といへば、無能上人の三回忌に當る年で、その追善のために書かれたものである。従つて人々の追憶もまだ生々しいしその記録も鮮やかである。その上、今から僅かに二百二十年しか隔つてゐないから、生活領域にも共通の部分があり、他の往生僧などにより勝ちな餘りに説話的な要素が割合に少く、なかなか寫實的で内面描寫なども克明である。

無能上人は今の福島縣桑折町の無能寺の開山で、徳川末期に現れた律僧である。當時、福島地方の庶民大衆の歸敬を受けたことは並ならぬものであつた。初めは日課稱名も一萬遍、經文などいろいろと讀んだが、終りには餘行を廢して専ら日々に十萬遍の念佛を稱へて往生を欣つた。

享保三年の春も更けた頃からいさゝか思ひ

の御様子であつたが、秋も木枯しの吹き荒む頃となつては次第に所勞が増して、翌享保四年の正月二日に入寂なされた。年齒僅かに三十七歳であつた。その御生涯からは、生の内面へ狭く深く切り込んでゆく深刻さと、純一にして無難な、潔癖にも近い透明さとの印象を強く受ける。

×

×

御病氣も大分進んだ秋の末の話である。信夫郡の或る信者が見舞に來て、信夫郡に土湯といふ湯があります、大變に身體によく効く湯ですから、そこで暫く療養なさつては如何です、としきりに勧めた。上人は、別段、恢復して長生きしようといふ氣もないが、福島方面の信者とも何かと結縁する機會も多くなうから、とて信者の勧めに従つて湯治に赴かれた。

湯の効きめが顯れたのであらうか、體力もいくらか恢復して顔色などもよほど晴れ晴れしく見えた。信者達が交るがはる尋ねてき

造るにも木炭が原料となるので、なくてはならぬ。また活性炭素用やカーバイト用に使用する量も可成りにのぼる。戦争になくてならぬ火藥を作るにも、鑛物をつくるにも木炭がなくては出来ない。

かうして鑛、工業の方面に是非とも必要な木炭の使用量がぐんぐん増加してきたことは當然であつて、これだけについてみて以前三倍以上に及んでゐるわけである。更にまた防毒マスクに使ふ木炭までも數へてくると限りがない。こうして木炭なしには戦争も生活も出来ないことになつて、木炭もまた兵器の一つであると云へよう。

○

それなら一體今年ほどの位木炭を生産する計畫かといふと、八億五千萬貫を目標としてゐる。尤もその内で消費目標は七億二千萬貫で、一億三千萬貫はいろいろの豫備量にして保留しておくわけである。

この目標を目指して木炭の製造業者はいろいろの困難を克服して増産に邁進してゐるわ

て、お湯の効きめがあつたのでせう、お顔の色も大變よろしくおなりです、お元氣になられたやうですね、などと言つた。それを聞いたときの上人の氣持の動きが、次のやうに書かれてゐる——

この度の病氣、本復なくして往生を遂げんこと本望なりと、心中に思ふと雖も、この間、人々たづねきて、湯も相應し容態もよく見ゆ、など申さるを聞けば、何とはなく心嬉しく思ふなり。われ常々、往生を急ぎ死を待つ思ひありて、又かやうに心動くことは、いかなる故ならん……

日課十萬遍を怠らず、ただ一筋に西方を欣ぶ上人ほどの人でも、他人から、本當にさう見えてかそれとも氣を引き立てようとの心使ひからか、御容態も大分およろしい様子などと言はれれば、何となく心嬉しく思はれて、ふと再起の日のことなど考へたといふのである。自分ながらいつまでも捨て去れぬ矛盾と不徹底に驚きかつ嘆かれたことであらう。生への愛着の根強さ。

聖者ならぬ私どもが病床にあつて、日々にかやうな氣持の動搖を経験するのはむしろ當然であらう。僅かの熱の差し引きが、直に意識の上に明暗雨様の映像を落す。見舞客の慰めの言葉が大した理由もなしにむやみに頼りになつたりする。

行業記のこの一節には何かしら沁み透るものが感ぜられて、考へさせられる。

x

x

それにつけて思ふのは、「死生ともわづらひなし」とか「生死一如」とかいふ境地が、口には言ひ易くして本當は如何に難しいかといふことである。生や死が概念的な對象になつてゐるとき、生や死をあであらうか、かうであらうか、と頭の中でいろいろと考へてみるときや、言葉に出して他人と語り合つてゐるときなどは、決して生死一如にはならない自分と死とは、段々離れて行つて、遂に自分はその死の姿に怯え戦くやうになる。死が青白い亡霊のやうに、行く手に立ち塞がつて、

けであるが、目下のところではまだこの目標に達するといふ所に行つてゐない。農林大臣が「今年の農林政策の中で一番心配なのは、木炭である」といつてゐるのもこの邊の事情を語つてゐるのである。

ある村では自分たちの使ふ炭は全部自分たちで焼いて、他からは買はないやうにしてゐる。ある學校では生徒たちに炭を焼かせてゐる。又ある縣の林務課では課員全部が二里もある山奥まで代り番に炭焼きに出掛けてゐる。こんなにして焼いてもまだ足りない。そこでいままで捨てゝ顧みなかつたやうな皮炭や屑炭までを全部荷造りして出し、まつたく荷造りも出来ないくず炭を自分の家で使ふ。製炭者の方ではいろ／＼と苦心して一貫目でも餘けいに政府に供出してゐるわけである。

○

また、折角木炭は澤山に出来てもこれを輸送するのに一苦勞である。何分山奥で製炭してゐるので、持出しが大變である。國民學校の兒童が手傳つて驛まで運んだり、運送屋自

こちらを脅すのである。ああでもない、かうでもないかと考へれば考へるほど、それはいろいろと恐しい武器や粉飾を身につけて、ますます大きな幽霊になつて、威丈高にこちらを脅す。

生もまた同じことで、實際の生の流れから切り離されて、その樂しさが誇大視されれば、生が自分とは別に在る何か實體的なものであるかのやうに思はれてきて、生への愛着がいよいよ上強められてくる。かういふやうに生や死が概念的な對象になつてゐる場合には、「死生ともにわづらひなし」といふことは、望めない。宗教は理屈や學問ではないといふことは、ここを教へるのである。

その境地は如何にも難しい境地であるが、それはまた、考へ様によつては、極めて容易なことであるとも言へるのではなからうか。何故ならば、考へられたり眺められたり語られたりしてゐた生死が行せられ成せられるやうになれば、それでよいのであるから。別の言葉で言ひ直すならば、客體的に自分の外に

あつた生死が、主體的になつて、自分自らが直ちに生死であり、自分が墓地にその中へ入り込むといふやうに轉入が行はればよいのである。如何なる宗教によらず、それが宗教の、いやもし宗教を道徳、藝術、科學などとは對立させて使ふならば、宗教などといふ言葉では包みきれない廣さを持つ生の振幅である。ところが、如何なる宗教に於いても、今そのことがいろいろの理由で最も遮げられてゐるのではないであらうか。

それを前戦の勇士たちは身を以て行じてくれてゐる。報道される幾多の輝かしい武勳は、いづれも胸の熱くなるものばかりである。皇國の道は、自らが現じ成するものである。自らがその道そのものである、といふことを、これほど如實に示してゐるものはあるまい。(鎌倉極樂寺西ヶ谷にて)

動車屋が利益を無視してまで働いてゐる。それでもいろいろな關係で滞荷し易い惱みのあるのは、木炭がかさばるもので致し方ないわけである。

さてこうして製炭から輸送と多くの人々が骨折つて急激に増大した木炭の需要に應ずるやうにしてゐるのも、木炭も亦兵器であるといふ氣持から、この重要原料をどしどし出しそれによつて他の戦時資材を造つてもらひたいからである。

これから間もなく寒さが来るのだが、都會の人が火鉢に手をかざすにも、木炭にはこれ程の苦勞がこめられてゐることをよく承知してあたらなくてはならない。それも量が少いとか、質が悪いとか云つて不平をいつたり、餘分に炭をたいて暖をとるやうなことがあつては申し譯ないことである。燃料を大切に少しでも木炭を節約するやう心掛けねばならない。また若い者なら今年は火鉢は無用と決めておく方がよいだらう。

可
歌
壇



山野
喜久代選

大阪府 大村 恒一

わが稻のよろこばしくも實を結ぶ
秋のはじめとなりけるかな

評 素直な敬虔な農人のよろこ
びが、これも素直な歌ひぶり
で表現されてゐる、一見平凡
な歌のやうに見えて、なかな
かさうではない。けるかなと
末を感動詞で結んだのも餘情
あつてよい。

舞鶴海軍病院 齋藤 耕善

かへらじと誓ひし人も死なずして
病の床に月を見んとは

評 勇んで大君のため聖戦にむ
かつた若者が、事志とたがひ
病を得て病舎に呻吟する無念
さよ、同趣の歌の多い中でこ
の歌を代表としてとる

東京 上野 昌子

一筋に君を祈りぬ八百よろづ神よ

この日も守り給へと

評 夫か戀人か兄かともかくも
身に親しい人が戦地に身命を

投げうつてゐる。女はその感
情の細かさから個人的愛情の
深さから、どうぞ無事で歸つ
て欲しいと神に日日祈らぬ日
はない。立派に戦死して來い
とは、どの妻も、どの母も、
どの妹も恐らく本心では思ふ
まい。生きてゐる限りは無事
であつて呉れと願はぬものはな
い。戦死した時によく死んだ
と涙を見せぬ烈女でも。

北海道 花田 順往

法鐺を懸納して

法の音つたへし鐘も國のためいく
さ勝ちぬく力とはなれ

東京 八木澤壽美男

皇后陛下煉乳御下賜

みめぐみの至らぬはなしおん國母
いくさの庭にたたぬ民にも

名古屋 山田 順澄

水の土香爐のごとく睡蓮を浮けた
りきよき浄土を思ふ

秋田市 小崎 蓮葉

働きにつかれて母のかへるらん居
待ちの月はすでに昇りぬ
新潟縣 北條 竹香
子を孫を戦の庭に出だしつつ知も
る翁たのしむべしや

名古屋 市 鷺津 耕順

あざけりと侮蔑を忍び十年経て今
日を贏ち得ぬ亡き母のため

北支 渡邊 明道

過ぎし日の戦のあとに野いばらの
白く氣高く咲き包ひけり

東京市 梓 頼子

天がけり波にひそみて守らむと勇
み征でます八重の潮路を

東京 小柳 萬

ソロモンの戦果を讀ふラヂオ邊に
むらがる人の館のあかるさ

長野縣 丸山 力圓

畏くも北の果まで御勅使を仰ぐ今
日しも吹雪すさびぬ

福岡縣 三浦 壽子

焼石の原に伏しつゝ戦ふと便り來
りぬ親はをろがむ

愛知療養所 稻本 利一

病みふして臣下の道も盡さぬに御

下賜の沙汰よつつしみおののく
岸和田市 田中 庄眞
戦傷を受けにし友の顔見れば面は
ゆきかな我が生活も

朝鮮 中村 もん

神技もて海底深く敵艦をしづめし
艇はつひにかへらず

北海道 岡塚 治郎

自らの勞苦に心ひしぐときいまさ
ぬ父の佛懸しき

静岡縣 一向 山人

富士の嶺の麓の僧ら淨財を國に捧
ぐと行脚をぞする

名古屋 市 江崎 孝融

廣きかな宮城ヶ原の稻田には足穂
の稻のそよごそすれ

東京 吉本 悦男

秋風よ心して吹けふるさとにわれ
思ふ母瘦せてゐ給ふ

埼玉縣 瀧川 信雄

ひぐらしの鳴きつる森を紅に染
めてしづかに日のしづみゆく

内はつきに「浄土」二首以
部歌壇係あて住所氏
名明記の上送ること

投稿規定

投稿規定

を學科りよンタサ

一チンガるすとんは奪

雪 香 司 生 野 畫 と 文

聖の國印度は英國の侵略以來亡國の憂目を見て百五十年、その英國が敗戦を續け今や没落の餘喘奄々たる時、印度憂國の志士は敢然として立ち民衆は翕然としてこれに和し、反英獨立の聲は燎原の火の如く目的貫徹へと轟地である。ここに冷靜なる第三者として考察するとなほ幾多の複雑性が窺はれる。先づ政治的に俯瞰して色分けするならば從來、非協力派(ノン・コオペレーター)國粹派(スワラジスト)獨立派(インデペンデンサイト)國民派(ナショナルリスト)緩和派(モデレーツ)自治派(ホーム・ルーラー)などの思想的對立と、又一方には印度教と回教との宗教的確執に容易ならざるものがある。ここが又英國のつけ込み處で、一方の制壓に行き詰つた時は他の一方に特殊利權を與へて咬み付かせるといふ、磨劣手段をとるのであるが、今回もその氣配が已に明らかである。國民會議派に對し回教聯盟總裁ジシナーは合流を肯ぜず却てバキスタン(回教王國建設)を主張して居る。これは背後の黒幕を想像することが出来る。

であるから譬喻二億四千萬の印度教が獨立せりといふも、この回教徒との提携が出来ない限り、折角の獨立も爆彈を抱へて晝寢して居る様なものである。この兩教の融合の困難性は往年ガンディーがロンドンに行き圓卓會議の席上印度人同士の間にな一致の不始末にガンディー自身も手を焼いた苦き經驗を以て居る。この宗教的多年の癪が如何に手術されて而して初期の目的がされるかに吾人は刮目して居る。

同じ國民會議派でもガンディーはその目的の善惡に拘らず武力即ち暴力によることは絶対に否定する處であるが、ネールやアザツはさうでない武力によつても飽迄目的を貫かんとするので、同じ派にもこの大きな異色のあることは忘れてならない。といふものゝ吾人はドコ／＼までも會議派が目的を貫徹して印度人の純粹なる印度建國を祈つて止まぬものであるが、その中心人物たるガンディー翁が吾人の眼には斯く映するのである。

ガンディーの思想は近代科學文明の優越性を

印度を誇る

文明そのものが悪いのではなく、決して決してない。

科學文明をサタンが掌握したからである。であるから今日の科學文化を誇る優越性とい

て安泰はない。かゝる利己的安住は求めざるに始かずと考へて居るのであらう。彼が理想であり且つ現實は實にスワラヂー（民族の自

納とかいふ辯證法文化は何時も晝間の明るい世界ばかりを追求して夜の來ることを氣づかなかつた様であるが、この世界的思想の一

心服せざるのみならず寧ろ否定するのである。それといふことは文明の意義恩恵は人類生活の向上發達即ち幸福を齎らしむるものでなければならぬ。然るに近世科學文明に陶醉して居つた人間はあの飛行機による時間と距離の短縮と、その破壊力の偉大なる結果は實に思ひ半ばを過ぐるものがある。これは科學

ガंधーのケルリ（系引車）は本國の資本主義と機械文明に抗議し、其の民族に自給自足の道を求めんとす。



（考）

ふものは、彼の眼から見ると宛ら噴火山上に副を争えて居るが如きで勝利者自體にも決して

給自足）とアヒンサ（不殺戮で大きな意味の愛による征服）この二つである。これはより

民族を濟度せんとするのであるが、彼は又彼一代にしてその成果を收めんとするものではない。最後の勝利は必ずこゝにあるとの牢固たる信念で終始一貫して居る。この點西のヒットラとは大に其趣きを異にして居る。ヒットラはナポレオンの如く英雄として大政治家として歴史を飾る存在であるが、ガンヂーは政治家として國家の改造者でない。彼は人類は共存共榮にあるべしとの救済者としての聖者で今世界にたつた一つ輝いてゐる明星である。斯かることを前提として渾沌たる印度民族の將來性を考へた時、近代人の分析とか歸納とかいふ辯證法文化は何時も晝間の明るい世界ばかりを追求して夜の來ることを氣づかなかつた様であるが、この世界的思想の一

印度を語る

大轉換期にガンヂーを生んだ印度人は全世界への誇りである。彼は現實は一步步々理想の國の建設へと世界人の心眼を開かすべく不斷の努力を續けて居る。それは即ち彼が無抵抗の革命で最も弱きものは最も強き永遠への力を養つて居るものである。斯うしたことをやゝもすると齒痒い様に見て居る第三者も多分にあるが鴻鵠の志とでもいふべきか。萬里長城やピラミットでさへ三年や五年では出来ない。

況してやサタンの手握られた科學を取り返し世界人の迷妄打開がそんなに無難作に出来るものではない。尠くも佛教者丈けは氣づいて居るであらう。佛意が大乗佛教にありとすれば、その大乘佛教が佛滅後何百年の後に結實したかを先づ想ひ而してガンヂーの理想を仰ぐべきである。

梵鐘の目方

京都知恩院の梵鐘は大きなことゝ音のよいので有名で、入浴の人々には一度は自分で撞いてみるという位であつた。

しかしこの巨鐘も鐵銅獻納に一役買つてすでに勢至堂の鐘樓から別れを告げた。八月三日にその惜別鐘供養が盛大に執行されたのであつた。またその他大小幾多の寺院にある梵鐘は續々獻納される筈で、目下その手續がなされつつある。従つて「お寺の鐘」で親しまれてゐた諸所の梵鐘もやがて破邪の法器に生れ變つて第一線に行つて御奉公するのであります。

次に梵鐘を見ただけですぐ目方が測れる方法を紹介しませう。この方法は商工技師佐野清助氏の考案せられたものであります。

梵鐘の下に物指しをあてゝさしわたしで一番大きな所を測ります。但しこれは曲尺で測

つて下さい。そしてその尺の數を三乗して更に九倍した數値が即ちその梵鐘の目方(貫)です。即ち

梵鐘の目方(貫) = 3 × 3 × 3 × 9 × 尺の3乗

となります。この方法で計算すると梵鐘の重量は別表の通りになります。

直徑	重量	直徑	重量	直徑	重量
1.5尺	30貫	3.3尺	324貫	5.1尺	1,190貫
1.6	37	3.4	354	5.2	1,270
1.7	44	3.5	386	5.3	1,340
1.8	53	3.6	420	5.4	1,420
1.9	62	3.7	456	5.5	1,500
2.0	72	3.8	493	5.6	1,580
2.1	83	3.9	534	5.7	1,670
2.2	96	4.0	576	5.8	1,760
2.3	109	4.1	620	5.9	1,850
2.4	124	4.2	667	6.0	1,940
2.5	141	4.3	715	6.5	2,479
2.6	158	4.4	766	7.0	3,090
2.7	177	4.5	820	7.5	3,800
2.8	198	4.6	876	8.0	4,600
2.9	220	4.7	934	8.5	5,530
3.0	246	4.8	996	9.0	6,540
3.1	268	4.9	1,060		
3.2	295	5.0	1,130		

印度の獨立運動

情報局第三部長

堀

公

一

印度は北は世界最高のヒマラヤ山系から、南はコモリン岬に及ぶ約五百萬平方キロにわたり、日本全土の約七倍半の地域を占め、その人口は推定約四億に達する一大國であつて、眞に地大にして物多き世界の一大寶庫の名に背かぬのである。

印度を語る

元來、渺たる一島國に過ぎないイギリスが大英帝國と稱し、最近まで世界に調歩した所以のものはこの全世界に亘る廣大な版圖を領有し、これが搾取に依つて肥え太つて來たからである。その植民地の中でも特に印度は如何なる他

の植民地にも優つてイギリスにとつては重要な植民地なのである。

イギリスが東印度會社に解散を命じ、印度を正式に自國の領土であると宣言したのは今から八十四年前の一八五八年であつた。尤もイギリスが事實上印度を領土としたのは遙かに早くそれより百年前即ちブラッシーの戰のあつた一七五七年以來のことであつた。この時代に於て廣袤五百萬平方キロ、亞細亞の總人口の三分の一を有する印度を領有して居ると云ふことは、一方に於ては生産原料の獲得、他方に於ては生産品の販賣市場の獲得と云ふ二重の意義を有し、印度の領有によつて初めてイギリスが經濟的に世界に覇を唱へ得

たのである。更に政治上、軍事上から見てイギリスが印度を領有することによつて得た利益は何であつたかと云ふのに、近世に於てイギリスがスペインを取り、フランスを屈せしむるを得たのは、實にイギリスの海軍力であつたが、而もかかる大海軍の建設並に其の維持を可能ならしめたのは印度搾取に依るイギリスの富によるものであつた。

現在に於ても亦印度のイギリスに對する重要性は、形式に於て變化したにせよ、實質的には昔と少しも變つては居ないのである。

錫、銅、ゴム、鐵、ウオルフラム、鉛等の龍大な軍事資源、綿、小麥、茶、羊毛等の莫大な生活資源、又最後に英帝國全人口の八割を占める約四億の人口による戰時動員上の人的資源、印度が供給し得る此の三つの資源こそはイギリスの生命であると言へよう。

そこで昨今、朝夕の新聞を賑はしてゐる印度獨立問題特に反英運動であるが、先づその双方の主張を一見してみよう。印度に於て最も有力な團體であり彼の有名なガンヂーの指

印度の独立

導する印度國民會議派は去る八月八日ボンベイに於て印度獨立に關する決議案を可決したが、これによると會議派の主張とする所はイギリスは即時印度に完全なる獨立を許すべきである獨立した印度にして初めて全力を擧げて聯合國と協力、外敵の侵略に對抗することが出来るのであると云ふのである。

これに對しイギリスは印度の現状を以てしては到底獨立は許與し得ない。現下戰爭中に於ては殊にそうである。先づイギリスと協力せよ。しかれば戰後獨立を與へる事を約束すると云ふのであり、斯くてイギリスの不誠意な態度に憤慨したガンヂーが非暴力に依る反英運動開始の指令を出すに至り、これに對し英國側は八月八日深更からガンヂー一派の檢束を開始し、ここに印度獨立問題は愈々激化されるに至つたのである。

從つて澎湃たる印度の獨立運動の將來は此

のイギリスの印度に對する強き執着と、印度人が抱懷する印度人の印度建設の強き要望との抗争に懸つて居るのであるが、ここにイギリスの執る三段構への方策が考へ得られるのである。

第一は印度の獨立運動が現在新聞に報道せられて居るが如くに進展するとしてイギリスが執る極度の彈壓の手である。イギリスは重大危機に直面すればする程、なほ東印度を確保せんとして死力を盡くすのは自明の理である。

現に獨立運動の火の手が漸く盛んとなるや英官憲は國民會議派要人百四十九名を逮捕し、その後も國民會議派黨員の逮捕と各地支部事務所の差押とを全國に亘り強行したので、これに反抗する實行に依る運動は各地に勃發し既に多數の死傷者を出したと報せられてゐるのである。

然し乍ら其の後印度民衆に依る實行運動は未だ急激の進展を見ない模様で一般の觀測は武力なき印度民衆の實力行動は英國官憲の斷

乎且巧妙なる彈壓の前に鎮壓される可能性なきにあらざと云ふに在る様である。

第二は印度の獨立要求が今後益々熾烈となりイギリスが政策上印度に獨立を許與する事が便宜と考へた場合にイギリスの執る印度懷柔の手である。此の場合イギリスの許容し得る獨立なるものは單に名目上の獨立に過ぎないことは自明のことである。名實の相伴ふ獨立を印度に許すことは、それがイギリスの崩壞を意味するが故に、英國として考へ得ざる場所である。しかしこの行き方に對して印度人の中にも相當の共鳴者があるのである。然し乍ら斯る姑息的な方法に依つて印度本然の要求たる印度人の印度實現を期待し得ざることには餘りにも明白である。印度人は第一次大戰當時のイギリスの約束と而して其の後に來つたものについて思を致す要がある。第一次大戰が酷であつた一九一七年イギリスは戰爭終了後印度に與へるべき種々の權利を約束して印度人の協力を得たのであつたが戰後イギリスはかかる約束を履行するどころ

か却てローラツト法と云ふ法律を公布して印度人の政治運動に監視の眼を光らせ、剩さへ集會出版の自由を奪ひ恬然として恥ぢなかつたのである。

當時暴戾極まるイギリス官憲の手によつて無辜の民衆五百の生命が奪はれたアメリカツア事件を唯一つ想起しただけでも全印度人をして悲憤の涙を絞らしむるものがあるであらう。此の悲劇に次でガンヂーは先頭に立つて不服従運動を展開したが、禁錮六年の刑に處せられ、一九二〇年から一九二二年に至る運動も空しく恨を呑んで屈服したのであつた。

印度の獨立運動

次で一九二九年にはガンヂーを指導者として地租半減、鹽稅撤廢、軍費半減、政治犯釋放を呼號し、完全なる獨立を要求する運動を起したが、イギリスは一面に於てはサイモンと云ふ政治家を主班とする調査團を印度に派遣、反面では彈壓を強行しガンヂー、ネ

ール父子、チャンドラ・ボース等を逮捕投獄し、合計二萬七千名に及ぶ大量投獄を敢てしたのである。斯様にして第一次大戰及び其の後に於ける印度獨立運動は表面に於けるかかき彈壓と裏面に於けるイギリスの至らざるなき隱微なる懷柔の手によつて脆くも潰滅せしめられたのであつた。

第三には印度獨立要求更に熾烈を極め流石のイギリスも遂に内外の情勢已に非と見、名實共に獨立を許與する様な事態が出現したとして其場合イギリスの執る策謀の手である。

印度の喪失は即ちイギリス没落に拍車を掛ける所以である事は誰よりもイギリス自身が最も好く知つて居る所でイギリスとしては如何なる犠牲を拂つても印度に獨立を許與しない様努力する事と思はれるが、歐洲に東亞に敗戦に敗戦を重ねたイギリスが彈壓の手も懷柔の手も共に印度を確保する十分な方策でないと思へるに至つた時イギリスは殘された唯一の方策として一應印度の要求を容れ獨立を許與し乍らもイギリス得意の謀略の手に依つ

て印度が大東亞共榮圈の一環として日本に協力し、東亞新秩序の建設に寄與する事を凡ゆる手段を講じて妨害するに相違ないのである。更に一步を進めて考へてみるのに我々は印度が東亞に存在するといふ一事によつただ單純に日印關係の將來を卜し勝ちなのであるが、印度がイギリスから獨立を獲得することと、大東亞共榮圈の一員として我國と眞の協力をすることとは區別して考へる必要がある。

印度の獨立運動の指導者達の中には英國の長い間に於ける宣傳に影響され、滿洲事變以來の帝國の行動を往々にして誤解或は曲解して居る節がある様にも見受けらるのである。帝國の眞意を諒解し、帝國の理想に共鳴する者もあるのではあるが、中には帝國の眞意を解さず英國の宣傳に踊り帝國を以て恰もイギリスに取つて代つて印度の支配者たらんとする野望を有するが如く看做し、これを聲を大にして叫んで居る者もないではない。かかる印度の指導者の一部の態度は眞に悲しむ

印を誑く

べく、憐れむべきものと思はれるのである。

日本としては印度の獨立運動に對して深い同情を寄せるもので、印度が米英勢力を驅逐し印度本然の姿を具現した場合、日本として印度を敵とすべき理由はない事勿論である。

唯現在印度の獨立運動に對し、無條件に拍手を送る譯に行かない所以は、印度指導者達の背後に糸を操るイギリスの策謀在るが爲で我々はこれを十分監視するの必要があるのである。

以上に述べたのは、印度人の印度實現上に於けるイギリス側の妨害、謂はば外部的障礙であるが、次にその内在的障礙について一言しなければならぬ。

面積五百萬平方キロに近く、人口約四億を

擁する大地域だけあつて、印度人と一口に云つてもその中には難多の政黨派、人種、言語、宗教等の差違それによる軋轢を香貨措くべしとして多年の間かかる各種の差違、軋轢を激化せしめて相互に分離を計つて、その統一を殺ぐ事に成功すると共に或は時に印度人に喰はすに利を以てして之を籠落し懐柔し印度統治に利用し來り、自らは統治の大綱を握つて瑣事は之を印度人同士の論議に委せるの方策を執り來つたのであつた。

印度がイギリスの桎梏を一蹴して完全なる獨立を享受し、印度人の印度を實現せんと欲するならば、イギリスの設けた牢である分離統治政策に陥ることなく、卽座に兄弟牆に闖く愚を罷めて、此の際強力なる團結によつて印度よりイギリス勢力の徹底的驅逐を圖ることが先決條件なのである。

最後に我が日本と印度との關係をみるに、日本の印度に對する態度は、既に去る五月二

十七日、第八十回帝國議會に於ける東條首相の聲明によつて「帝國は、米英の兵力が、印度に残存する限りに於ては、之を徹底的に破碎せんとする、牢乎たる決意を有する」旨表明されて居るのである。

從つて印度に戰爭の慘禍が及ぶか否かは、一に印度人竝に其の指導者達の決意と實行力の如何に懸つて居るのである。

ここに於て、我々が印度の指導者達に對して、今にして臨趣を誤り、悔を千歳の後に貽さざらんことを望むものであり、印度指導者達が、現在の天與の獨立の機會を好く握み、宿年の願望を達成せんことを心から祈るものである。

印度の福祉と其の光榮のために印度人が一致團結してイギリスの桎梏を破碎し、米英兵力を印度より驅逐一掃し以て大東亞に於て完全なる新興獨立國として甦生する日の來らんことを、我々は衷心より希望する次第である。

印度の風景

文と畫 小林量造

印度を語る

むかしなら一口に唐天竺といつて遠いところの代名詞であつた。とても行きたくも行けない所であつた。それが今では暴戻イギリスに對抗して雄々しく立ちあがつた印度民衆のすがたをその日の出来事にして知ることが出来る。そればかりでないわが皇軍が印度のすぐ手前にあつて大東亞共榮圈の建設に奮闘してゐるのであつて、われ／＼としてもお召を拜せば、明日にでも行くかも知れない。とに角印度の情勢がすぐそのまゝ皇國の聖業にも關係してくるわけで、昔とは大

變な違ひとなつた。



歐洲航路の船なら印度南端のセイロン島コロンボ港に必ず寄つたものである。このコロンボに上陸して街を歩いたものは誰でも知つてゐるやうが、ここにハレームといふ日本蟲屋なので有名な寶石商があつた。日本の宮中に寶石を獻上して戴いたのだと云ふ宮内省の謝状や、東郷元帥の署名入り寫眞等を掲げてゐた。日本語が上手なので、われ／＼も誰も店を訪れるし、また日本人には仲々に親切で、市中案内の自動車を手話してくれたりしてくれるのであつた。

×

自動車で市中のお寺廻りをしようと思つて行つた。印度櫻といふ百日紅のやうな桃色の花が林の中に咲いてゐて、遠くの方から美しく眺められた。林の手前の方には汚ない赤屋根があつた。長屋にはコバルト色の窓があつて、その軒下に童顔の老翁が白帽赤衣といふ姿で土の上に兩足を投げだし、われわれの自動車を見送つてゐる等はとても長閑な風景であつた。



守護龍を負ひたる佛像

やがて車が椰子の葉影で涼しい公園の中に入つて行つた。ゆつくり走る車の後から、龍を抱へた土人が一人何やら叩きながら追つてきた。案内人にあれは何かと質ねると、蛇使ひだといふ。これに二ルビーやるとコブラの踊りがみられますといふことであつた。そこで早速車を止めて見物することにした。コブ

ラは頭のひらたい茶褐色の熱帯地特有の蛇である。

土人がビンといふ笛を吹き始めると、中にゐるコブラが龍の蓋を押しあけて出てくる。そしてしばらく敷布の上を頭を下げてうねり廻り、また土人のかげ聲で温和しく龍に這入つていつた。まあ他所では見られぬ大道藝人であらうと思つた。

印度では蛇が多いが、この蛇が尊い守護神の一つとして崇められてゐるといふ。そしてあちこちの寺院の佛像の光背に龍が澤山に彫られてゐる。しかしこの龍の形が日本の龍とは全然違ふもので、いづれも頭部のひらたい杓子形をして

ゐる。これは、どうやらコブラの化象としか思へないものだといつてもよささうな気がした。

ロンボの博物館に行くと、そこには熱帯地特有の動物の標本が集められ、また、印度特産の寶石が陳列されてゐる。また各部落土人の原始的住宅模型が出品されてゐて、その中でわが國太古の家と似てゐるところのものがあつて大變に興味を憶えた。

陸海軍病院慰問浄土

寄附者芳名 (敬稱略)

二 圓	鹿兒島市樋之口町五三	寺前 景介
三 圓	兵庫縣水上郡柏原村	高室 しか
一圓五十錢	同 上	中川 鈴
一圓六十錢	青森縣五所川原町川端町	願昌寺檀徒中
一圓五十錢	田邊市元町淨恩寺	岸 信宏
一圓五十錢	弘前市富田町大野三九	畠山 吉助

印を讀る

また、ヒンズー教の寺院の中にも入つてみた。その寺は總石造りの大伽藍で、細かい像を積み上げた大アーチ型の入口がついてゐた。中に入るとローマの古跡をみるやうな彫刻を施した石柱が列をなしてゐる。薄暗い迴廊を巡つて内陣の前まで進み、内陣の祭壇を拜さうと石段を上りかけると階段の上に座つて番をしてゐた一人の僧にいきなり叱られてしまつた。



ヒンズーの本音と水を捧げろ女

壇を拜さうと石段を上りかけると階段の上に座つて番をしてゐた一人の僧にいきなり叱られてしまつた。「神聖な内陣には信者以外の者が入つてはならぬ」といふきついお立腹なのであつた。それでもすばやく上を見上げてみたら正殿の祭壇には御本尊の黒象の化身がうやうやしく祀られてあり、数本の蠟燭が供へられてあつて暗い内陣をぼんやり照してゐた。

一圓五十錢	大阪市東淀川區南濱町二丁目	提法寺
一圓五十錢	三原市須波町	横山 法順
一圓五十錢	神奈川縣浦賀町田中	常福寺
三圓	北支乙第三五〇一部隊第一七五野戰郵便局	
二圓四十錢	愛知縣海部郡市江村源空寺	坂田 慶福
五圓	朝鮮鎮南浦市中碑石町二二三	小林 卓導
一圓五十錢	茨城縣稻敷郡阿見村阿見西郷	柳田 長雄
六圓	滿洲新京特別市西朝陽北胡同四〇八	加藤 登志
三圓	埼玉縣比企郡松山町	渡邊 義雄
三十五圓	大阪市住吉區田邊本町七ノ三五	城 恩寺
一圓五十錢	東京府北多摩郡清瀬村上宮教會療園	中島善三郎
五圓	山口縣大津郡通村	小柳 萬
一圓五十錢	島田 隆道	
一圓五十錢	大阪市南久寶寺町四ノ十六東洋算盤會社内	高橋 禎子
一圓五十錢	江戸川區東船堀町八高貫方	淺井 萬吉



お 十 夜 物 語

八百谷順應

天高く馬肥ゆる仲秋十月となると淨土宗のお寺では盛んにお十夜と云ふ特殊な法要がとめられる。双盤鉦、魚版、大長太鼓等を伴奏にして色々と節つけられた念佛を唱へる。お寺によると在家の人達が泊り込み、かみしも迄着用に及んで二夜三日乃至七日七夜も法要やお説教の間々に鉦太鼓で、中には聲自慢の特殊で流暢なお念佛が唱へられる。双盤鉦が五挺も六挺もならべられに太鼓とお寺によつては雲版まで、はいるのだからなく賑かである。

法要も笏を割つた所謂割笏で拍子を取りながら、平素讀む吳音の阿彌陀經でなしに特に漢音で特殊な節のある、所謂引聲阿彌陀經が讀誦され、又引聲念佛が割笏の拍子で行道しながら唱へられる。そうした法要がすむとこん度は參詣の善男善女からの特別依頼による、志ざしの精靈追善回向のための誦誦回向文朗唱の法要が勤められ、參詣の善男善女が志ざす精靈の生前迄も回顧して思はず涙にむせぶ情景が展開される。それがすむとお説教と云ふ次第で其の次が

又双盤念佛と云ふ工合に參詣者は次から次と眞に法悦を満喫すると云ふ有様である。

そこで淨土宗寺院でこの十月に勤修せらるゝ念佛十夜法會なるものゝ緣起及法式内容等を具さに検討して見ると崇高なる信念に充たされた佛教樂の極致を織り込み會座の道俗自ら法喜充滿の境地に導入せられ自然に極樂界會に在るの思ひに住せしめ、熱烈崇高なる信念の下に合掌稱佛せざるを得なくなるのである。さすがに學徳一世に秀いでたる古今稀れる慈覺大師圓仁大徳と云ふ佛教大樂樂家の垂範たることを如實に感ぜしむる次第である。殊に其の勤修せられつゝある代表的寺院の十月の十夜法會及念佛別時會の緣起が其の多くは武人の現當二世の回顧及戰歿諸生靈の得脱回向を主願として居る點は本宗道俗の等しく本法會を再検討再認識して時局下に相應しき法會に編制して宗教報國の實を擧げた次第である。

さてこの法要の起原は我足利室町時代の末葉に於ける武人の堅固

不磨の信仰美談に其の端を發し且つ其の對象となり給ふた洛東眞如堂即ち京都東山神樂ヶ岡眞正極樂寺の本尊阿彌陀如來慈覺大師作に就ての縁起由來がある。この如來を作くられた慈覺大師圓仁大德は下野國都賀郡の人で姓は壬生氏延暦十三年の誕生、チャキ／＼の關東兒柄木縣人であつたので、十五歳傳教大師最澄の門に入り學德兼備の巨匠となられたが、年不惑を超へて眼疾を患へ遂に一切を放棄して叡山の北麓に菴居した。かくして靜かに死を待つと云ふ境地に陥つたのが後、靈驗を感じ眼疾癒へ心機大轉換、仁明天皇の承和五年勅命を奉じて入唐した。在唐十年或は天台山上に登り遍く五臺を巡り、或は都長安に碩學高德を尋ねて顯密二教の蘊奥を究め、特に北臺に於て文殊菩薩を感じ又五台山大聖竹林寺に於て象牙の笛に依り法道和尚より同利上が現身に感得せる極樂界世の水鳥樹林の所唱の七五三等の妙曲即ち入功德池の浪の音所唱の曲調を附したる引聲阿彌陀經引聲念佛の妙曲を傳へられた。而して右法道和尚傳の妙曲は恐くは法照禪師五會念佛の一種の曲調だつたのであらう。法照禪師五會念佛の曲調は同禪師感得の極樂系の聲明として、其當時盛んに尊崇唱せられ天台の魚山支那系聲明、眞言の南天系龍樹の密教聲明、華嚴の實忠の都率系聲明等と併稱せられる一種獨得の聲明、即ち佛教聲樂なのである。慈覺大師圓仁は承和十四年九月に歸朝後、仁壽元年此の所傳の念佛三昧引聲阿彌陀經、引聲念佛を以て常行三昧堂の法式と定められた。而して其の本尊は嘗て苗賀明神の

靈告に依つて得た櫻の神木を以て彫刻した阿彌陀如來である。爾來これが叡山常行三昧堂恒例の法要となつて居つた。尙慈覺大師歸朝船中の奇瑞感得の彌陀如來像も此本尊佛の胎中佛となしたのである。而して此の如來は圓融天皇永觀二年に洛東眞如堂に遷座せられ、此の遷座に就ても種々の奇瑞があつたことが傳へられて居るが、今は之れを略して置き、それから四百年餘の時代が過ぎて後花園天皇の御代となり、此の眞如堂の御本尊が都人士の間に盛んに仰信の的となつた。

時の征夷大將軍足利義教の執權に伊勢平氏の宗族伊勢守平貞經と云ふ武將があつた。其子兵庫頭貞國（或は弟とも云ふ）は武人とは云ひながら若い時から淨土の教に歸依し、日常口稱念佛を事とし、夫れに血族關係の問題から遂に出家得道の決心を越させる様な事になつた。貞國は決意堅固に最後の起誓として彼の眞如堂の靈佛前に三日三夜參籠して、其滿願の日に髪を斬らんと念願し、三晩通夜を重ねて一心に稱名念佛を勵んだ。然るに滿願の夜の五更に至ると夢幻の裡に聖僧が現はれて「汝が現當二世共に我を頼む心に偽りなし、善哉／＼來世のことは唯吾が誓願に任せ、現世のことは今より尙三日の後を待つがよい」と、はつきりと告げられた。貞國が只恐れ入つて拜禮して居るに更に

心たにたてし誓ひにかないなば

よのいとなみはとにもかくにも

と、云ふ詠歌が聞へて来た。且くして貞國は醒めた。茲に貞國は此の露告に依り出家を三日延期することにした。然るに不思議にも其の翌日父伊勢守貞經は上意を以て吉野に隱居を命ぜられ、貞國は瑞夢の如く三日目に家督相續を命ぜられて伊勢守に任官、武運彌々榮ゑることになつた。

この奇瑞を傳へ聞いた將軍義教は隨喜の餘り台命を下して貞國の奇瑞を感じた三日三夜の念佛に更に七日七夜を修せしめ、十日十夜の念佛會とせられこの事實が十月であつたことから、十五日が阿彌陀如來の御縁日と古來から云ひ傳へられて居るので、十月六日から十五日迄の十日十夜と定められ其の法式の内容としては慈覺大師傳來の法照、法道の所謂極樂系聲明の引聲阿彌陀經、引聲念佛を修することを永式と定めた。これが、眞如堂十日十夜法要の起原である。貞國は爾來家益々榮へ、念佛稱名愈々勵み、其の子良眞は後に清淨華院第十九世、又黒谷金戒光明寺の第十五世の上人となられ、貞國は深心院悅堂眞運と號した。

こうして爾來六十有餘年間眞如堂天台、淨土兼學の寺であつたし向阿上人三部假名抄を書かれた遺跡である。眞正極樂寺の法要となり、又他の天台宗の寺院でも時として勤められる法要となつて居た。

第二百二代後土御門天皇は淨土教を御篤信遊ばされ常に淨土三部經、とりわけ阿彌陀經を讀誦遊ばされ給ふて

御製

誓ひありと思ひ得る身になす罪の

おもきもいかで彌陀はもらさん

一すぢにたのむ心の道しあらば

二つの河はなみかくるとも、

この御製を拜しても如何に御信仰に厚くおはし給ふたかが拜察せられ、眞に恐れ多き極みである。時、明應四年三月鎌倉光明寺の八代觀覺祐崇は召されて宮中に阿彌陀經の御進講を申上たところ、觀覺不斜種々優渥なる勅説を賜ふた。更に其の十月には光明寺第六世良吽上人が伊勢平氏平貞永の三男であり、觀覺祐崇は夫れから三代目の光明寺の住職であつて、眞如堂の十夜法要と因縁淺からざる伊勢平氏貞永の子の住職であつた寺の住職といふ關係もあり、旁眞如堂の大衆を率ひて紫雲殿に於て引聲阿彌陀經引聲念佛の十夜法要の大導師を勤修せられた。

天皇感懷淺からず、遂に勅旨を以て此の十夜法要を淨土宗法要の永式と定められた。これが鎌倉光明寺十夜法要の緣起であり、又淨土宗寺院の十夜法要の起原であるのである。

其後此の法會に更に戰歿亡靈の追善法要を併修する事として三河大樹寺に於ては松平親忠公の本願に依り七日七夜の念佛、安土淨嚴院に於ては織田信長公の本願に依り同じく七日七夜、八王子大善寺に於ては北條氏照以下八王子城陷落の際の戰歿亡靈の追善を兼ねて

二夜三日の大法會が勤められた。殊に大善寺十夜は寺の法要であるばかりでなく八王子市の年中行事の大なる者となつて今に非常に賑はつて居る。

上來述べ來つた様に十夜法要は主として其の内容は、極樂承聲明と云はれる引聲彌陀經、引聲念佛を修する法照禪師の五會念佛の一曲が法道と上より、授導された佛教聲樂の精髓を發揚した法喜充滿の聖會で、慈覺大師圓仁大德の唱導せられた我佛教界の一大音樂法要なのである。

然るに後世其の法要の典據を無量壽經の下卷の十日十夜の文、又は鼓音聲經や大阿彌陀經等の此土修善の文に結び付けたり、初冬三五彌陀正覺と華嚴經にありなどと云ふて阿彌陀如來成等正覺の報恩法要であるとして、此土修善の文に依る法要であるからと云ふ考へで、理論的に曲解(?)して放生會やら、其の他簡單なる法要を十夜法要と銘を打つて勤められることは理屈はどうでもつけられるけれど少々見當違ひと云はれても是非がないことである。

増上寺關山西譽上人が引聲彌陀經、引聲念佛の講本を五百數十年の昔に於て幾多の困難をも排除して版刻せられて後世の宗侶のために貽しおかれ、現に其原本は宗寶として鎌倉増上寺、鎌倉光明寺等に保存されて居るにも拘らず、十夜法要の眞意義が没却せられ、十夜法要と銘を打ちながら一時間そこ／＼の簡略法要でお茶をにごすに至つては、勤めない不精者よりは、いくらか、まだとは云へ

誠になさけないことと考へられる。現代は次から次と種々な音樂が編曲せられ國民の情懷指導に夜に日をついで斯道の者は活躍されて居る。

夫れと反對に佛教界の方面では兎もすれば先德の遺された佛教聲樂の眞髓を發揮する様な法會法要迄も廢滅に類する状態になり行くことは遺憾至極である。今十夜法要の盛んに勤められつゝある寺院の存在する地方では、在家の双盤念佛結衆講中があつて、假令變形したとは云へ、引聲念佛が民衆の心の中にとけこんで頗る熱心は如實に法悦を滿喫して居る様相がまさしくと見せられて眞に嬉しく有難く感ぜられる。例せば八王子大善寺の十夜法要、又北多摩郡車返し本願寺の十夜なぞがそれである。鎌倉光明寺の方は僧侶の手に依つて引聲彌陀經、引聲念佛等が勤められるが民衆の双盤念佛は振はない。八王子及車返しの方は民衆の方の双盤念佛の方は盛んだが僧侶の方の引聲の方は勤められない。但し八王子の方は精靈迫善のための誦誦陀文は頗る變形の者になつてしまつては居るが盛んに朗唱される。不幸にして三河大樹寺、安土淨嚴院の法會を拜謁して居らぬから此の方は何とも申上られない。川柳や俳句にも澤山吟詠されて居る程民衆に深く喰ひ込んだ此の十夜法要が廢たれ行く有様を考へる時眞になさけなく考へられて茲にお十夜物語と題して秃筆を呵した次第である。



雜史雜記

子母澤 寛

雲井龍雄の事は餘り書いてはいけないことになつてゐる。しかし龍雄は、一體小塚原で首を斬られなければならぬやうな事をしたのだらうか。どうも疑はしい、同閥内の廣澤眞臣の勢力を邪魔にした木戸孝允との猛烈な闘争の犠牲になつたに過ぎなくて、龍雄は斬首になる程の悪い事はしてゐないやうな氣がしてならない。芝の二本榎に屯した歸順部曲

點檢所も二萬人の同志などゝはいふけれども果してどれ程の人数だつたのか。私は十分の一にも足りない人数だつたと見てゐる。尤も

龍雄はなかく過激な議論をする。これは一と頃の革新政治家の議論が、一部の反感を買つたと同じやうなものだ、龍雄はちよいとした黨派的なものを拵へようとした、たゞそれだけで、これに廣澤が關係してゐるやうに見えたりしたものだから斬られたのだらう。

龍雄研究の權威高木藤太郎翁とは、度々お目にかゝつて御教示をいたゞいたが、翁も先づその邊のところを見てゐられるやうであつた。

その龍雄の首は、一度小塚原へ埋められた

が、後にこれを掘出して谷中天王寺の龍雄の碑の下に埋め、さらにこれを故郷米澤へ運び、今そこ墓の下にある。たと記録の上だけでは、未だに小塚原にある事になつてゐるが、事實は、高木翁などの奔走によつて故郷へ埋まつてゐるのである。

*

私は前年會津若松に遊んだ。あの愛宕山といふ山の中腹に近藤勇の墓がある。土地の人はあそこには同志が勇の首をかついで來て埋めたといふが、それは間違ひで、首もなければ骨も髪の毛も入つてはゐない。若し何にか埋まつてゐるとすれば、何にか勇の小さな所持品位のものであらう。あれは勇の同志が會津へ落ちた時に、勇の死を知り、遙拜の意味で建てた碑にすぎない。勇は武州流山で官軍に捕へられ、板橋で首を斬られた。首はそのまま砂糖漬として京都へ運び、胴は斬處へ埋めた。

京へ運んだのは、京を以て勇の犯罪地とし、本來ならば、ここで斷首すべきものと解した當時の官軍の人達の頭腦は少し變で、それには頭を護送しなくてはならない。護送となると、何時何處から元の新選組の同志が飛出して來ないでもないから相當の兵力を裂いて送らねばならない。それで板橋で斬つた。これは當事者の香川敬三が後に薩摩のものから突込まれて彼を監禁して置くには少なからぬ兵力が要るからと答へたのもわかる

*

首を京の三條の磔に晒した。大それた人氣で麥湯、甘酒、餘湯その他見物人のためにいろ／＼な物賣りが出たといふ。その晒首を佐倉藩の御留守居役だつた依田學海が見て、その「露筋」の中に生けるが如しと書いてゐる。勇は自分の拳が握つたまゝでらくに入るといふ大きな口で、日頃これを傲慢にしてゐたが、その口をへの字に結んで生きてゐるやうに死んでゐたのだらう。かねてこの斷罪の前に髪を剃らせたのはこの事を思つたからである。人間すべてこれ位の覺悟はかねて大切だ。さてこの首はその後どうなつたか。

*

京から大阪へ送られて、千日前に晒された。むかしの刑場だ。それ迄は記録にもあり、それ迄はわかるが、それから先き、とんとこの首の行衛がわからない。私は前年新選組の研究を思ひ立ち、自然この首の事にも及んだが、それ以來、十三年、心にかけてはゐるが首は何處へ埋まつたか、未だにわからぬ。御承知のお方があらば御教へをいたしたいものである。

尤もこの首の行衛については私より早くどういふ緣故のある方が大阪の富豪某氏が、いろ／＼な人を頼み、終には講釋師などをさへ頼んで四方八方へ手をかけて探したが、六七

年の歲月を費して尙ほ少しの手がかりもなかつたので諦めたといふので、千日前で取棄になつたのではないかも知いふが京阪には、勇の世話になつたものが相當にある筈だ。

鴻池なども多少の縁故はあつたやうだし、勇の首をどうしても葬らはなくてはならぬやうな女も二三ある。取棄などいふ事ではなく、この人達の中の誰かと密かに首を手に入れて、自分の寺にでも埋葬してやつたのではないかと思ふがどうにもわからない。

*

胴體は勇の娘たま子の夫宮川勇五郎外武州多摩郡調布町の勇の生家の人達や舊門弟などが協力し、門人の中の一橋家のものが刑場の番人を金三兩で買収して雨の降る夜、これを掘返し、桶に入れて故郷へ運び、ここの龍源寺といふ勇の菩提寺へ埋葬した。今、墓があるが、この下には確かに胴體が埋められたのだ。

*

上州の博徒國定忠治は四十二で同州大戸の關所で磔刑になつたが、その夜の中に、首と右腕が何者にか持去られた。何者といつても、番人は元より知つてゐた譯で、子分達によつて首は故郷國定村の養壽寺へ、腕は妾のお徳といふものが自分で預かつて、金五兩を添へて、伊勢崎の善王寺へ箱へ入れて葬つた。これはこの寺へ行けば見せてくれる。

首の方は、養壽寺で一旦、墓の下へ埋めたが、どうも役人の詮議がきびしい。この寺の住職貞然法印といふのは、忠治の讀み書きの師匠なので、磔刑の時も命乞をした位だから、役人に墓をあばかれて再び首を持つて行かれるのを恐れて、再びこれを掘出して、丁度お皿を十枚位も入れるやうな、深い細長い箱へ入れお寺の天井裏の棟木の下へ吊して終つた。これではちよいとわからない。

そのまゝで三十年も経つて、寺の屋根の修

繕をする事になつて、ふとこ奴を見つけた。箱の中には貞然の書付が入つてゐて忠治の首の骨とわかつたが、この骨には顔がない。墓から掘出す時に無くなつたのだらうが、どうも貞然の書付そのものの筆蹟などにも少し怪しいところがあり僞首だらうとの説もある。

*

それから、も一つ面白いのは下總笹川の鑿藏の首だ。

——つよく——

淨き友の會 信仰座談會案内

一、日時 十月二十五日(第四日曜日) 夕五時
十一月十二日(第四日曜日)

一、法語抄 中村辨康先生

一、會所 本郷區東片町七八橋本方

(電話小石川四九七六)

(來會歡迎)

淨き友の會幹事



朝鮮 中村 茂舞

また来るといふて歸りぬ月見草

評 淡々とした日常茶飯事のもの

の様であるが、何か奥深いものをもつてゐるやうな気がする。

月見草も場所や時刻を補つてあまりあると思ふ。

京都市 福島孝治郎

夏氷挽く 鋸の輕ろやかに

評 暑さも飛んで了ふやうな涼しい香を感じさせる。

名古屋市 堀場 典雄

暮参り我れに二歳の姉ありて

評 二歳でなくなつた姉の暮参りをしたといふのを斯く表現したのである。

一寸變な表現のやうであるが其處がまた面白いのである。

満洲國 鶴岡 慈禮

暮連き營庭月を掲げたり

兵庫縣 水谷 良子

草庵や旱のあとの雨もれる

和陸赤 北垣 千里

おしほりが出て寛げり夏座敷

豊後竹田 田邊 春草

蛾の這へる 翁の面や夏祭

京都市 拜郷 賢三

夕立雲と競ふて歸る小舟かな

小樽市 平井 正念

梨一つ鉢に大きく實りけり

満洲開原街 八木 茂

見はるかす筑紫の夏のさかんなる

浦和市 瀧川 信雄

蟬の聲入道雲の彼方より

三江市 鶴岡 慈禮

高粱の太畑なびく夕茜

東京 渡邊 一念

風すがし夕顔白く月に映え

廣島市外 山口 勇治

日盛りの坐敷を變えて話合ふ

北海道 花田 順往

秋扇ともなくゲリラ戦となる

京都市 拜郷 賢三

涼風に冷ゆる床几を人寝たり

大阪市 水谷 勉

蟬の聲きこえず鶏を追ふ蟬

同 堀田 俊光

綠蔭に懸へば蟬のあからさま

島根 石見 千翠

軍神の墓にぬかづき玉の汗

同 仁阿 彌

睡蓮のしほむ雨の日は近く

大阪市 森 正義

満月やよくも伸びたる屋根の草

夢科 小山 しづ

みいくさに召されて萩の門閉さす

富山市 新田 愛染

岩を這ふ糸龍高く夏の雲

大澤陸病 深尾 重三

晩涼のひととき英靈の列よざる

京都市 福島孝治郎

梅干すや籠一杯の土用照り

東京市 市川 香岸

暑さにも澄み渡りゆく庭の風

同 萩原 通孝

街道をすれすれに飛ぶ燕かな

伊豫 楠田 満

あか／＼と迎へ火今をさかりなる

京都市 永田 七郎

立秋の今宵は蜘蛛と語りけり

大阪市 松本 哲洲

愛著の別れに來り夏時雨

富山縣 佐伯 光安

濁水にまぎれて咲くや末草

東京市 外川 肇

ましぐらに飛び行く鳥や夏の空

同 坂口 光雄

せゝらぎに夕月くだけ阿塵なく

英城縣 眞木謙太郎

足跡の水の溜りや夏深し

北海道 前野 賢一

涼しさは青海原に帆が一つ

岐阜縣 立木 眞敬

亡き師の初盆をむかへて

孟蘭盆會遺風のまゝに迎火す

大阪市 南 貫隆

稻の穂のみのりて國の秋となる

高知 横山 亮圓

銀打たす寛の水や苔の花

官製はがき一回二句以内とし、住所氏名明記の上「淨土」編輯部俳壇係あてに送ること

投稿規定

官製はがき一回二句以内とし、住所氏名明記の上「淨土」編輯部俳壇係あてに送ること



厭欣思想は非國民的思想か

擔當 中村辨康

(質 問 歡 迎)

(問)

卒直に申し上げて御訂正を御願ひし且つ

御教へを得たいと思ひます。淨土教で申して居りまする現實の世界を捨て、早く淨土へ往生したいと云ふ氣持は私には起りません。日蓮宗あたりでは淨土往生を願ふのを非國民的態度だと

申して居ります。世間でも「冷飯たべても娑婆の方がよい。淨土に早く行きたいとは思はない」と言つてます。これが偽らない人間の氣持ではないかと思ひます。然るに

淨土の教では厭離穢土欣求淨土をすゝめます。之れでは人間の要求と違ひ、國家的要求とも異つて居るから、淨土教は發展したいのではないかと思ひます。此の厭離穢土欣求淨土をよくのみこめるやう御教示下さいまし。(神戸・O・T生)

(答)

維摩經に「心淨ければその土淨し」と云ふ言葉がありますやうに、住

民の心の汚れに依つて其の國土が穢れたりとなすのであります。然し世界諸民族中、日本民族こそは心の最も清いものであります。南

洋等の未開民族も汚れに染まぬきれいな心を持つて居るらしく想像されますが、それはまだ文化が低いと云ふ點に依るものであつて丁度「こども」見たやうな狀態ですから、伏藏されて居る爲に文化が進めば何う變化するかわかりません。尤も教育次第ですから日本が指導して行けばいつまでも純眞を持續することが出来るかも知れませんが……

然しそれらは比較論であります。元來人間の心は利己主義です。そこをつけこんで米英は日本人へ利己主義個人主義自由主義を注入し神聖なる日本を汚濁せんと企てて且つ實行しつゝあつたのであります。この意味から言つて大東亞戦争は實に神意なりと云はれる所以であります。賤米英汚濁の思想を一掃排除することが出来るからであります。このやうに穢を厭ひ淨を欣ぶは向上を求むる者の必然的な希望であつて「厭離穢土欣求淨土」と

は言ひ換へれば「厭離穢心欣求淨心」と云ふことに外ならないのであります。しかも穢心と言はずして穢土と云ひ、淨心と言はずして淨土と云つて居るところに大きな意義があるのですが、それを逆に穢土を日本とし淨土を日本以外の處と考へて居るのは、考へて居る人の間違ひであつて、厭欣心はそんな粗相な意味のものでは斷じてありません。私達は自分及び周圍の人々の心の中から穢あるものを取り去り、淨い姿のまゝでありたいと念願して居るのですが、その醜い心の狀態を(自分一箇だけの問題でないから)周圍即ち場所の考へにうつして穢土と云つたのであります。私達の住む日本の本質まで穢土と云つたのではありません。しかも「土」の觀念は個人主義を主張しないところに出て来る考へでありまして、普通ならば個人的な偽惡戯のみ



が論られるのですけれども、個人々々について言はず、その偽惡醜の集合に注意を向けて居るところに、むしろ東洋的なものがあると云はねばなりません。五濁惡世と云ふ考へも同じでありまして之は個人惡の集合を時代惡として居るのであります。即ち五濁の總括を「垢濁」とし垢濁の内容を見濁(個人思想)煩惱濁(個人的欲望)衆生濁(自分ばかりでなく周囲も)命濁(生活)この四つが穢濁であるとするのであります。

ですから「厭離穢土」とは現實の此の世を捨てよと云ふのでなくして、此の現實の中の醜い心をしてよと云ふのでありますから、決して非國民呼ばれりてをされる筋合のものではありません。却つて國內の人々の醜惡なこゝろを取りのぞいて皆な悉く純な淨い心になれと云ふことをすゝめるものですから、皇運の隆昌を冀賛し奉ることにもなるわけであります。

若し冷飯をたべて居てもよいから悪いことをして居たいと云ふものがあるならば、それこそ非國民であり非冀賛であつて亡國思想の持ち主と云はねばなりません。日蓮宗あたりで厭欣心のことをそんなふうに言つて居るならば、それこそは本當のことを知らぬもので、むしろ盲滅法と云はねばなりません。取るに足らない議論です。

厭欣心と云ふものは愚かな人々の要求には添はないかも知れませんが、人間の眞の叫びであつて然も國家の要請に應ずるものであります。

また厭欣思想の爲めに淨土教が發展しないならば發展しなくともいいでせう。私はさう

涅槃像と猫

(問)

お釋迦さまがおなくなりになつたとき、百獸がそこに集つたと云ふことですが、猫だけは來なかつたと申します。どういふ譯で猫が來なかつたのでせうか。何かいはれでもあるのでせうか。

(答)

涅槃像にいろ／＼の獸がかゝれて居るけれども「猫」だけは除外されて居ると云ふ話は、私も幼年の頃きかされ

とは思つて居りません。眞の意味が諒解されたら淨土教こそ凡ての人の遵奉すべき貴い教であることがわかるであらうと信じて居ります。一と頃大本教や人のみち教團が榮えたとき、色々の人から「淨土教でも大本教や人の道を學べ」とすゝめられました。私はそんなものはいくら盛んになつてもうらやましくはないし、またそんなものを眞似てまで淨土教を隆盛にしたいとは思はない。それは畢竟淨土教を墮落せしむるものに過ぎないからと御返事したことがあります。群盲が象を撫でて批評して見たところで正確な批判は出來ません。決して御心配になることはないと思ひます。

(東京・愚問生)



たことがございます。その理由に就いてはよく覚えて居りませんが、何でも猫は恩を知らず恩をすく忘れるから除外されたのであると云ふやうな意味だと思つて居ますが違ひますかしら。

釋尊入滅の圖は印度にもあるさうで、現にカシアの西南の釋尊入滅の地には長さ二十尺の臥佛石像があり、かの有名なアジヤンタ第二十六窟には臥佛の前に弟子及び國王並びにその家來など十六人と、佛の足の邊に弟子が一人、空中に天人が十三人彫刻されて居るさうです。その他マツラ、ベナレス、錫蘭島のタン

トリ・マライ、緬甸のラングーン郊外などに臥佛像があり、ベグーの臥佛像などは今度の大東亞戰爭で度々新聞などに紹介された有名なものであります。

支那に於いても涅槃像は古くから造立されたさうです。就中、敦煌千佛洞第十九乙窟には大臥像を刻出しその後壁に諸大菩薩並に弟子

子達、摩耶夫人、諸天及び鬼神、國王人民、鳥獸等數十體を彩畫してあつて、涅槃像中の白眉であらうと言はれて居ります。

我が國では法隆寺の五重の塔の中にある塑像が最古のものです。また高野山の金剛峯寺にあるものは絹本着色で竪八尺八寸三分、巾八尺九寸五分、中央臥佛の周圍に、普賢文殊以下三十九人及び獅子一頭がそれに配置されて居て實に整然として居り、しかも後世に見るやうなあの激越な悲嘆の狀がなくむしろ靜寂調が深く現はれて居ることです。無論國寶です。

涅槃の會座に來集したものは五十二類と言はれて居ります。大般涅槃經疏第一に依れば比丘衆、比丘尼衆、比丘衆の中の十地菩薩、菩薩衆、優婆塞衆、優婆夷衆、離車族衆、大臣長者、毘舍離王及び夫人並に後宮眷屬及び諸王人民、諸王の夫人、諸天女衆、諸龍王、諸鬼神王、金翅鳥王、乾闥婆王、緊那羅王、摩睺羅伽王、阿修羅王、陀那婆王、羅刹王、樹林神王、持呪王、貪色鬼魅、諸采女、諸鬼

王、諸天子、四方風神、主雲雨神、大香象王、獅子獸王、諸飛鳥王、水牛牛羊、諸神諸仙、諸蟻王、人天衆、山神衆、海神河神、四天王衆、帝釋天、三十三天衆、夜摩天衆、都率天衆、化樂天衆、第六天衆、大梵天王及び梵衆、阿修羅衆、欲界四天王衆、大自在天衆、東方佛世界無邊身菩薩、南方佛世界無邊身菩薩、西方佛世界無邊身菩薩、北方佛世界無邊身菩薩、以上の五十二類となつて居ります。

現在我國の諸寺に見る涅槃像は無論印度や支那に見られない澤山な獸類をかけたものであつて日本創始のものであります。日本でも初めは少なかつたが後世になるに従つて段々増加したものであるとことです。然し現在の涅槃圖を見ますと、ここにゐない動物は獨り猫ばかりではありません。

まだ／＼足りないものが猫のほかに澤山あります御ひまのとき、一度調べて見て御報告下さいまし。



法事と回數とそのわけ

(問)

佛教では人が死んで七日七日に御回向して頂きますが、それはどう云ふわけですか。神道では十日祭、五十日祭百日祭を行ふやうですが、何故に佛教の祭日と異なるのでせうか。また一周忌三回忌七回忌十三回忌十七回忌などと、どう云ふわけで、間の年を飛ばすのですか。また十七回忌の次ぎは何回忌なのでせうか。地方に依つて違ひがあるやうに思はれます。本當のものをお教へ下さいまし。(下谷・愚人)

(答)

七日七日に弔ひを行ふのは「中有」の説に依つたものです。典據としては「地藏本願經」ですが、中陰經、梵網經、瑜伽論などにも出て居ります。七の七回即ち累七追善を行ふことは七七四十九日で中陰が終るとするからであります。

次の百箇日と一周忌と三回忌

とは支那の儒教の禮式に倣つたもので、神道のことはよく知りませんが、その百日祭とか、一年祭と三年祭とかの祭は儒教から來て居るものらしく思ひます。

七回忌以後は三、七の順を追ふのでありまして、則ち三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌、この七回を第二重の累七追善と稱へて居ります。一般庶民は三十三回忌を以て最後の追善とするのであります。この三十三回忌からは飛んで五十回忌(三十七回忌四十三回忌四十七回忌は認めません。三河あたりでは行つて居りますが、それは三七を重ねたまでで根據はありません)を行ふのは官位あるものの爲であり、百回忌は三公の位あるものに限り百回忌以後二百回忌三百回忌と百年毎に行ふのは朝廷のみに限つたのであります。然るに段段下々の者が上のものを見倣ふやうになつて

一般にも三十三回忌以後の五十回忌を認めるやうになりました。これが全國を通しての法事の回數であり、七回忌以後の法事は日本獨特のものであります。してみますと、七々日から五十回忌までの法事は印度支那日本の三國のものが併用されて居ると云ふべきであります。徳川期以後のことであらうと思はれますが處に依りますと、五十回忌以後五十年目々々に法事を行つて居ります。

次ぎに毎年行はないで飛ぶのはおかしいと思ひになられたやうですが、實は祥月命日と云つて毎年追善して居りますし、中には命日に毎月追善供養して居る御家もありますから飛ばして居るわけではありません。唯特定の日を定めて特別に孝行の意を新たにすることは必然的なものです。但し之も我が國風が祖先を大切にすることからであつて、全く他國に見ることの出来ない美風良俗であります。また實際上このやうに丁重に祖先をまつる家は榮え、なげやりにして居る家は衰へたり、亡びたりして居るやうです。

浄土まが

静・動・忙・閑

☆ 漫 画 協 作 田 ☆

ヤツと杭戦する蔣介石は
静中動なり掛聲はかりの
ル・ベルトは動中動にても。
半身不随のチャールズは
静中静といふところ……
忙中閑は大臣や社長はかり
でなく、また閑中閑はルンペン
ばかりでもありませぬ。

御多忙
お嬢さん



2



動中の動
「ユースな」に
なせ帰るが……し
「おユース聞い
たらこうして
おくれぬん
仕事だく」



閑中の閑
「おママ大丈夫」
「ま……今日は肉なし
日だよ」



下手な
落語家

善一
笑はぬ客と
笑はせやうと
苦心しても、
少しも笑はぬ



コレハ
動中
静中
なり





隣組菜園

雄 徹 碑

私の隣組の組長さん、小川さんは六十を少しばかり越した見るからに人の良ささうな老人である。骨太ながつちりした體格、節くれだつた大きな手、一寸猫背になつて歩いてくる様子なぞ、最初逢つた時は地付きのお百姓さんかと思つたほどである。が、本當は舊市内にある唐物屋の店を息子に譲つて、この新開地に隠居所を建てゝのんきに暮してゐるらしいのである。

この小川老人は朝はびつくりするほど早く起きて、先づ庭の茄子、大根畠から始まつて、近くの空地に作つた自分の野菜畑を見て廻つて、せつせと手入れをしてゐる。

それから隣組の家々の庭を一つ一つづつ廻る。これは自分の畠の作物の生育状態と隣組の畠のそれとを比較検討してゐるらしいのである。私の家なども

「やあ、どんな家配です」

なぞと云ひながらはいり込んで来る。

「こりや立派だ。茄子はかう云ふ風に作らなけりや」

なぞとお世辭を云つたり

「トマトはもつとわき芽をつんでやらなけりやいけませんよ」

と云つて、自分でせつせと芽をつんで行つてくれたりする。

こんな風に一通り敵狀偵察を終へてからなんとなく安心して家へ歸つて朝食を喰ふらしいのである。

この老人は大變畠作りは詳しいやうなので私などは時々野菜作りに就いて、小川さんの意見を聞いたり指圖を仰いだりするのであるが、教へてくれることは仲々詳細を極めてゐる。

ところで、今年の茄子畠の隣組全體の成績から見ると小川老人の畠はあまり上等とは云へなかつたのである。

「肥料をくれ過ぎてしまつて……」

と老人は辯解してあるいてゐた。大きくなりかけた茄子の苗が途中でしほれかゝつてしまつた。

「あんまりいちくり過ぎるからなんですよ」

ひますね、大概、役徳ですよ、ヘッヘッヘ」と笑つてゐた。二三町離れた消防署の櫓から双眼鏡で見られてゐるとは一寸氣が付かない。煙どろぼうも飛んだ災難と云ふものである。

ところがこの話を常會の席上で聞いた某女は、——この人は小女と二人切りで暮してゐる——

「あら、それじゃ私のところなぞものぞかれてゐるんじゃないかしら。應接の窓から櫓が眞正面に見へるんだから。——厭だわね」と大いに恐懼を來たした。

「そりや解りませんよ」

と安西さんはわざと眞面目な顔で答へた。某女はます／＼顔を赤くした。

この安西さんは元は農家の出だから畑作りは本格的である。一日おきに非番になるのを利用して空地を見付けては開墾してゐる。尤も他人の地所に無断に這入りこむのだから、時々地主に目付かつて断はられたりする。す

ると安西さんは「然しネ、旦那、目下の時局と云ふものはね……」と時局が如何なるものであるかと云ふことから説き起して、食糧増産の急務を力説し、最後に何も家を建てるのを邪魔する譯ではない、家を建てる時には何時でもこの畑を壊してもよろしいのであるから、何卒これを默認して貰いたいと献願するのである。理路整然、情理をつくして説かれるから地主も泣々承知すると云ふことになる。

地主と云ふものは、どう云ふ譯か自分の土地に這入りこまれるのを嫌ふらしい。安西さんはそれを承知で押しの一手で大分方々の空地を開墾してゐる。

私などは自分の庭の少しばかりの畑を持ってあましてゐる位ひだから、安西さんの大がかりな開墾事業には心から敬服してゐる。

「随分出来ましたね、これじや市場へ出す程出来るでせう」

と私がせつせと畑をたがやしてゐる安西さんに言葉をかけたら、

「どうしまして。うちには子供が九人、私と

女房入れて十一人の大家族ですからね。これ位ひの畑は直ぐ食つてしまひますさあ。いなこを飼つてゐるやうなもんですよ」と大いに笑ふのであつた。

安西さんと小川老人とは畑作りの競争者になつてしまつた。安西さんが例の押しの一手で開墾した土地へ小川老人が割り込んで来る。小川老人は専ら趣味の方面からであるが安西さんは趣味に實用を兼ねてゐる。

ところでこの競争者はお互ひに相手の作柄をほめ合つてゐるのである。

「安西さんのやり方は本格的だから……」

と小川老人が云ふと

「いや、小川さんのやうに出来なけりや。私の畑のものは皆んなへばばかりでさあ」

と安西さんは一應譲歩するのである。

然し小川老人は安西さんのゐないところでは

「私はね、トマトなんぞは、安西さんのやうに澤山作ると云ふよりも大きい奴を作る方針

でね。小さいのを澤山作つたつて面白かありませんよ」

なぞと云つてゐる。

ところが、この二人の共同の畑の作物がち

よい／＼盗まれると云ふ事件が持ち上つた。

涼みがてらに散歩に來る近所の工場の若い

の達が面白半分を持つて行くらしいと云ふの

である。二人ともいまいまして交る交る

見張つてゐるのだが、さう一晚中見張ると云

け譯にも行かないので大事な茄子やトマトの

秀吉と洪水

何事も指導者が率先垂範してことに當つて

こそ圓滑に敏速にゆくのである。ある年の洪

水に秀吉が自分から土俵を擔いで堤の切れた

のを防いだといふ話がある。

ある年のこと洪水で淀川の堤が切れ、人々

が難儀したことがあつた。この時秀吉は自分

で見分に出掛けて行つた。そして一體どの位

の土俵があれば、この水を防ぐことが出来る

畑が毎晩のやうに荒される。

常會で隣組が顔を合せた時に二人はこの對

策に腐心してゐた。

「ねえ安西さん、例の櫓の上から見張るつて

わけには行きませんか」

と小川老人は眞面目に相談を持ちかけた。

「そりや駄目ですよ。何しろ夜ですからね。

火の手ならすぐ解りますが、夜のどろぼうは

一寸見當が付きませんまい」

と安西さんも本當に残念さうな顔をした。

かと質ねた。傍のものが早速、四五萬俵もあ

れば防げますと答へた。秀吉は「それでよい

なら易しいことである」と、すぐ在所々々に

觸を廻して土俵を拵へさせた。

秀吉はふと向ふの方にゐた友田左近右衛門

といふ者を見て、「あの者はわが合肩に丁度よ

ささうである。召しつれてこい」と命じた。

そしてこの左近右衛門を合肩にして自身で土

を運び始めた。

秀吉の傍には諸侯大夫を初め澤山の者が供

奉してゐたが、秀吉が自分で土を運び始めた

すると例の某女は

「夜、双眼鏡でのぞかれたりすると困るわ

ね。この暑さに早くから雨戸を閉めて置く譯

には行かないし」

と眞つ先に反對した。

その畑どろぼうはいまだに擱らない。こと

によると安西さんは櫓の上から、それでも一

所懸命で畑を覗つてゐるかも知れないのであ

る。

のをみて、黙つてゐられないので皆眞似をし

て土を運び出した。

さあこうなると見物にきてゐた人々は申す

に及ばず、傳へ聞いた近郷の老ひも若きも、

男も女も皆われもわれもと、出てきて土を運

んだり石を引いたりし始めた。

かくてさしも濁流が渦を巻いて流れた大洪

水で切れてしまつた堤も、わずか半日ばかり

の間に應急修理が出来て、水を防いでしまつ

た。後になつて人々は「左近右衛門こそ合肩

になれて幸せものよ」と云ひあつた。



収容所の教化

— ハワイで抑留された窪川僧正の近況 —

金 田 明 進

布哇ホノルル港口サウンドアイランド（砂

教使も同様収容されてゐたのである。

出る者がなかつた。

島）の俘虜收容所には昨年十二月七日（日本八日）午後五時一齊に米國秘密探偵ジーマンのために逮捕された日本人が多數抑留されてゐたが、抑留者團長大谷源治氏統率のもとに極めて靜謐に、しかも元氣よく與へられた苦難境遇を克服して、日本國民の面目を發揮してゐた。しかしなしろ、アメリカにとつては大東亞戰爭勃發と同時に大敗北を喫した現地であるだけに、日本人抑留者の取扱ひも、相當に厳しいものであつた。逮捕されてから一ヶ月位は、抑留者は全部、軍事勞役を課せられてゐた。この中にはわが淨土宗布哇開教監窪川旭丈僧正はじめ本宗布哇在留の各開

敵國人抑留者に勞役を課することは萬國法に違反であるとの大谷團長の抗議により、後日勞役は免ぜられたさうであるが、抑留者日本人たちが一番こまつたのは野菜が攝れないことであつた。そこで幾度か野菜を當局に要求したが仲々容れられなかつた。しかし當局は「それほど野菜が欲しいなら、種子を交付するから、それを栽培して攝れ、畑は空地を賃與するから」と云ふことであつた。

ところかその座の一隅に居られたわが窪川僧正は眞先に手を擧げて野菜作りの勞役に服することを表明された。

ある日、米軍の司令がやつて来て、野菜作りの勞役志望者を募つた。ところが長い間の勞役と監禁生活のために多くの人々は心身に相當の疲勞を覺えてゐたので、誰も進んで申

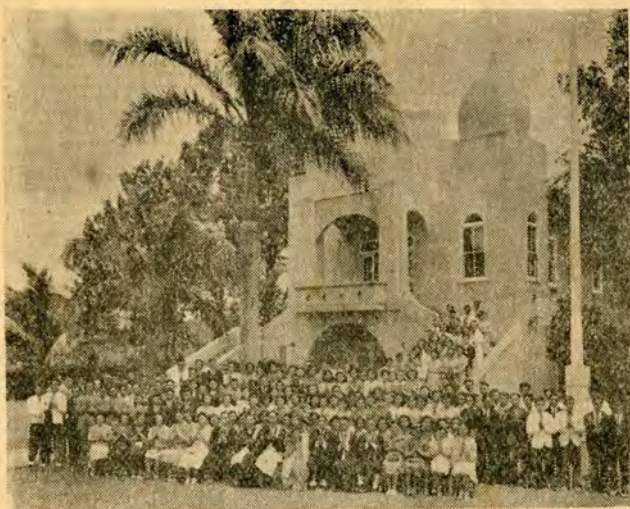
窪川僧正は逮捕の際ちようど風呂から出た所であつたので、このときの服裝も僧風ではなかつたが、その司令は擧手の窪川僧正をつづく眺めてから傍らの大谷氏に向つて「あの老練士は私の見るところでは佛教のビショップと思ふがどうか？」とたづねた。大谷氏は直ちに「然り」と答へた、すると司令は言葉をついで「ビショップは今第一番に手を擧げた。私は

相當に厳しいものであつた。逮捕されてから一ヶ月位は、抑留者は全部、軍事勞役を課せられてゐた。この中にはわが淨土宗布哇開教監窪川旭丈僧正はじめ本宗布哇在留の各開

ある日、米軍の司令がやつて来て、野菜作りの勞役志望者を募つた。ところが長い間の勞役と監禁生活のために多くの人々は心身に相當の疲勞を覺えてゐたので、誰も進んで申

窪川僧正は逮捕の際ちようど風呂から出た所であつたので、このときの服裝も僧風ではなかつたが、その司令は擧手の窪川僧正をつづく眺めてから傍らの大谷氏に向つて「あの老練士は私の見るところでは佛教のビショップと思ふがどうか？」とたづねた。大谷氏は直ちに「然り」と答へた、すると司令は言葉をついで「ビショップは今第一番に手を擧げた。私は

ビシヨツブともあらう人が野菜作りの労働な
どやつてはビシヨツブ自身の品位が低下しは
せぬかと思ふ。この點、ビシツブに尋ねてく
れ」と大谷氏に語つた。大谷氏は在布哇三十
五年の實業家であり、わが宗ホノルル開教院



の信徒總代でもあつて、常に窪川僧正から親
しく教をうけてゐる關係上、老僧正の性格も
日本佛教の高僧たちの心構もよく知つてゐら
れたので即座にその司令の問ひに答へた。

「キリスト教の牧師たちも昔はよく労働を
神聖なるものとしてよろこんで之に
服したものであるが、今の牧師たち
は之を厭つてゐる。佛教の僧侶は昔
から精神訓練は勿論、難行苦行と云
つて身體的労働を充分なし遂げなけ
れば僧侶にはなれぬことになつてゐ
る。この難行苦行を勤め上げたのが
佛教の僧正である。この窪川僧正は
日頃私が教を蒙つてゐることから考
へても、決してこの野菜作りの労働
が自分の品位を低下するものだと考
へられてはゐない。むしろ労働は
神聖なるものとの信念から衆に率先
してこの勞役を志望されたのだと信
ずる」

この大谷氏の答によつて、米司令は

「然うかなあ」

と感慨まことに深い態度で窪川僧正の申出
に許可を與へた。

かういつた光景を感激のうちに眺めなが
ら、その座にゐた他の抑留者たちは、つぎつ
ぎに手を舉げて野菜作りの勞役を志望したと
のことである。

× × ×

この話は、八月二十日第一回の日米抑留者
交換船淺間丸で歸朝された大谷源治氏によつ
て齎されたのであるが、かゝる不自由な艱苦
の境遇のなかにも、よく身を以て衆を教化さ
れつゝあるわが窪川僧正の上に、私どもは感
敬と感激を捧げてやまぬものである。

窪川僧正はじめ布哇各島のが宗開教使は
屢次に行はれた逮捕によつて全てこのサウン
ドアイランドに抑留され、ついで軍用船ユー
エスグラント號で二回に分けられて米本土に
移された。そしてその後更に各地の收容所を
經て、現在窪川僧正等は、ウキスコンシン州

キャンブマツコイの抑留者收容所に、他の一部開教使は現在ルイジアナ州キャンブリビグンストン兵舎の抑留者收容所にそれぞれ多くの抑留邦人と共に忍苦の生活をなし、しかも身心きわめて健全に過されてゐるのでことある。

大陸に移されてからも僧正は、この乏しくも貧しき與へられたる抑留生活に對し、不足がましきことなく、かへつて、衣食住のことごとに、知恩知足の精神を主張され、衆の教化に身を以つて當られてゐることである。

そして大谷氏が第一回交換船の發表以來僧正に幾度か、これで歸國の申請をするやうすすめられたが、

「俺はもう老年だ、こんどは若い者が早く歸つて御奉公するやうに」

と折角の其のすゝめを斥けられたとのことである。

最近、開戦後初めての僧正から管長殿下に宛てられた手紙が萬國赤十字社の手によつて

届けられたが、その書中にも

「……宗祖御流罪の芳蹟を體験し一月二十五日の宗祖大師御祥忌には御寶號の安置もなぐ從て香華燈燭の用意も無き暗黒裡に有縁の本宗門徒を會して合掌誦經のみに却て報恩の眞意を味ひ申候……」

とあつた。

幽囚の生活の中から、念佛に生きたるゝ者の尊くも力強いこの便りを拜して、無限の感激と歡びを覺ゆると共にやがて、第二回の交換船で歸朝されるであらうと云はれる窪川僧正はじめ各師の御清康を祈つてやまぬものである。

(寫眞はハワイ開教院で信者に圍まれた窪川僧正——前列中央)

群盲のたとへ

生れつきの盲人たちが王様から象といふものを見せてもらつた。盲人だからもとより目で見えるわけにゆかないので、皆々象に近づいて手で探つてみた。

やがて王がきて象とは何んなものであるか判つたかと盲人たちに質ねた。すると象の鼻を撫でまはした一人の盲人は答へて「象といふのは曲つた車のかち棒のやうなものです」といつた。すると牙を握んだ他の一人が、「いや違ひます。象は杵のやうな形をして固いものです」といつた。

ところが大勢の盲人たちはみな勝手な所を手で探つたので、「これこそ象である」といふ主張がそれぞれ違つてゐた。だから耳を持

つたものは「箕のやな形やをしたものである」と主張するし、頭を撫でたものは「象は小やまのやうな圓い高いものである」と云ひ張つてゆづらなかつた。さうかと思ふと腹を撫でたものは、「壁をたつたやうな平らなものである」と云ふし、股のは「大きな樹のやうなもの」と云ひ、脚のは「柱みたいだ、足のは「白の形だ、尾のは「おはなはの形だ」と主張した。

結局彼等は偽りを云つてゐるわけでないが正しくはない主張ばかりである。しかも彼等は自分のことばかり主張して他のものの云ひ分を聞かずに争つてゐる。

われ／＼も時としてこの群盲のと同じことを演ずることがないとは云へないのである。

法
語法
語
解
説

淨土の信を指標として

法然上人法語（その十）

中 村 辨 康

十方に淨土おほけれども西方を願ふは、十惡五逆の衆生も生るゝ故なり。諸佛の中に彌陀に歸したてまつるは、三念五念に至るまでみづから來りてむかへ給ふが故なり。諸行の中に念佛をもちゆるは、彼の佛の本願なるが故なり。いま彌陀の本願に乗じて往生してんには、願として成ぜずといふことあるべからず。本願に乗ずることは唯だ信心の深きに依るべし。

（法語抄四七、四八『和語燈錄』『勅傳』廿一）

解
説

國と云ふ國の中、如何にその地域人を等が廣大でありま

せうとも國體が不完全であるならば眞の國家とは言へません。アメリカ、イギリスを始めとしてどんな國でも世界中のありとあらゆる國々はみな訂正を必要とするものであり、若し訂正しなければ打討されねばならぬ國々のみであります。

獨逸伊太利等は現に自ら進んで訂正しつゝある國ですし、滿州國とか支那新政府とかタイとか云ふのは改めて出した國々であります。またビルマ、東印度諸島、フィリッピン諸島などは新らしく組織されんとして居ります。これらは日本流になることに依つてみな榮えて行くわけでありませう。即ち「無量壽」無窮の息吹きが吹き込められて眞生命を把握するからであります。

そしてこれらの國は何れも眞實の生命を持つことが最近

であつて、そこに歴史性がまだ付與されて居りませんから、確かな指導力とはなり得ない憾みがあるのであります。

是れに反して我が大日本は幾萬年の悠久なる歴史を持つて居ります。大和民族が數萬年以前の「スメル」文化の正統を維持して來た最も古く最も優秀な民族であることは、最近京都帝大小牧實繁博士その他に依つて唱導され、チグリス・ユーフラテースを中心とするメソポタミアの地方のスメール文化も、印度の蘇迷盧中心の古文化も、日本天孫民族のスメラ文化も皆な同系のものであり、中南米のインカ帝國の文化もまた同じ系統に屬するから、地理的に言つて日本はその中心地でなければならず、且つそれら諸地方の文化は皆な亡びてしまつたが、獨り我が日本のみは何時までもそれを維持して居る點から見て、その文化の最も本質的なものを把握して居たところの根源地たるを證明するものであると云はれて居るのであります。

また白柳秀湖氏の説に依ると、高天原民族は日高見の土地を選んで住所とし、農耕牧畜に精進したのであるが、世界最大の日高見たるウラルアルタイ山脈、天山山脈、崑崙山脈、アルコン山脈、トランスヒマラヤ山脈等々に依つて

取りかこまれたゴビ、タリム、パミール等一帯の高原から四方に散らばつたものの一民族であると云ひ、九州は高千穂附邊の日高見、中國は雲伯中心の日高見、更には大八洲の中心地たる大和日高見に於いて最も理想的な日高見が發見されたので其處に都が置かれ、後また攝河泉平野を前方に控へた山城日高見が選ばれたと云ふのであります。

この「日高見」の近くには大抵「國見嶽」「國見山」「國見峠」などの地名があつて、それは山にかこまれた盆地又は高原で、現に肥田、日田、飯田等の地は大なり小なりこの日高見の地形をなして居るのであります。即ち日高見とは「飯田上」と云ふことであつて信州の上高地の如きは日高見の近代名であります。

また舊約聖書のエデンの花園もユーフラテス等の四つの河の根元地であるところの日高見に外ならないとも言つて居ます。

これらから想像してスメル文化が亞細亞全體に亘つて行はれて居たであらうことが是認されます。そしてその文化を今尚ほ維持しつゝ然かも現代にまで進展せしめて來たものは獨り我が日本文化のみであることを思ふとき、この正統を遺憾なく紹繼して來た私達祖先の努力に對して心から

なる喜びと感謝とを感じざるを得ないのであります。

大體人類の始元は五十萬年と云はれて居りますが、五萬年前の第四期氷河時代に洞窟に入り火を保有することに依つて凍死をまぬかれて來たものの後裔が現人類であつて、それが氣候風土等の關係から白色黄色黑色等に變化したけれども畢竟同種であるのであります。

現人類は五萬年乃至一萬五千年のこのかたのものと推定され、語系の上から言ふと、ウラル・アルタイの漆着語系、インド・ゲルマンの屈折語系、崑崙の孤立語系の三大系に別れ、更にそれがいくつかに分岐して其區別は全く判然たる異りを示して居るのであるが、之れを實際上から例へば馬と牛との交雑種は絶対に出來ないし、馬と驢馬との交雑に依つて驢馬は出來てもそれは一代限りであつてその血統存続は出來ないのに反して、白馬と赤馬とは交配してその血統を存続し得ると云ふ事實は、同一種屬と異種屬との限界が自然則に依つて全く歴然となつて居ることを知るのですが、人類にあつては黒人と白人と黄色人とも混血し得られるのですから畢竟一種のみであつて、たゞその變りだぬとして皮膚の色や容貌などに區別があるだけなのであります。

併しながら既に外形の皮膚や容貌等に異りが出來て居るとすれば、内面の性格智能等の精神的方面にも異りがある譯であらうと思ひます。大別すれば東洋的、西洋的、南洋的と云ふやうにもならうし、また佛教圈、回教圈、基督教圈、原始宗教圈と云ふやうにも分られませう。随つてそこに文化の相違もあるわけであります。この差別は畢竟氣候風土の關係即ち太陽熱の相違に依るものだと言はれて居ります。

笑話 電話の困亂

「もしもし、こちらは尾久道見ですが、奥さん御在宅でしたらお取次願ひます」

電話口に出た女中が困つて、

「どの奥さんに御用で御座るませうか。御主人も奥さんですし、その奥さんも奥さんです。御長男も奥さんですし、その奥さんも奥さんですし、御次男も奥さんですし、その奥さんも奥さんですし、お妹さんも奥さんですし……もしもし貴方様のお名前をもう一度。」

「こちらは尾久です。」

(京都、大高 養造)

氣候上では熱帶寒帶の如くかたより過ぎたところは駄目であつて、溫帶の春夏秋冬が平均して居るところが一番よい譯でありますが、特に日本のやうな亞熱帶の氣候と寒帶の氣候とが交雜して居て寒帶にも熱帶にも生活の出来るやうになつて居るのは、地球上外には見當らないさうであります。

ニュージーランドの如き殆んど日本と同じ狀態に置かれて居りながら、氣候に於ての異りがあつて日本のやうには行かないとのことでもあります。それはその住民の氣質にハツキリした相違が見られるのであります。

日本はこの地球上に於て全く他に二つとない理想的な國であります。氣候と云ひ風土と云ひ國家組織と云ひ國民の氣質と云ひ國家理想と云ひ誠にすぐれた國柄であります。今までは世界の人は勿論、私達日本人でさへもその眞價をよく認識し得ませんでしたけれども、今度の大東亞戰爭に依つて追々世界の色々な國からも理解されやうとして居ります。かくして段々理解が深くなれば、世界の國々はどうしても日本を見習ひ、日本に同化せずには居られなくなるであります。

かうなると謂ゆる八紘はおのづから一字となつて眞の世

界平和が訪れることにならうと思ひます。

かくの如くして日本の土徳として日本に來り住むものは、おのづから「大和魂」なる日本精神を把握してしまふことになります。

そして丁度回教徒が一生涯に一度はメツカに參拜することを念願するやうに、世界中の諸民族は必ず一度は東京に來住して日本を學び日本精神の一端を掴んで歸るやうにならなければ、一人前の人間とは言はれないと云ふやうになると思ひます。

かう考へて參りますと、阿彌陀佛の淨土こそは日本の目指すところの目標であり指標であつたことが推察されま

う。

元來宗教には皆な理想とする國土が説かれて居ります。佛教で申しますと密嚴淨土とか寂光淨土とか極樂淨土とか云ふのがそれであります。ですから此の御法語に於いて「十方に淨土多けれど」と言はれたのであり、そのいろいろ淨土の名が示すやうにそれ／＼の特長を持つて居るのではありますけれども、法然上人が日本の國家觀から眺めて之れを選擧したところの淨土は「西方極樂淨土」であつて、その選んだ理由は西方淨土は最惡の者をも

捨てないと云ふ一點にかゝつて居るのであります。つまり一切のものを捨てない、最上も最下も同一國民として差別しないこと云ふことであります。萬民その堵に安んじ其處を得て、國民の凡ては一億一心以て國法に従ひ國則に遵ひつつ恭儉勤敏業に服し職に奉ずるところの民性となり得るところに、眞の無量壽性が成り立つと感得されたのであります。

さればその土の主なる阿彌陀佛即ち無量壽光の佛は如何なるものをも一子の如く攝取して捨てることなく、歸命し南無する限り國籍の如何、民族の如何を問はないのであります。八絃六合一切を包んで洩らすところはありません。此の故に法然上人は『三念五念に至るまで自ら來迎し給ふ故に』と言はれたのであります。

また色々の行の中、特に念佛唱名を採用したのは人間心中を表現する形式として是れ以上のものはありませんのと共に、それが本願となつて居るところに重要な意義があるからであります。

例へば日本民族の中にはいろ／＼の血を持つて居て、蒙古、韃靼、靺鞨、朝鮮、支那、アイヌ、インドネシア、ネグリト等々の血が交雜して居りますけれども、かの天智天

皇時代の童謡の

たちばなはおのが枝々になれども玉にぬくときおやじ
(同じ)をにぬく

と云ふやうに「橘」の實は枝に依つて色々な異りはあるけれども頸かざりの玉に貫くときは一つの絲で統一されて仕まうが、それと同じやうに民族的血液の相違はこと／＼く天皇の下に統一されて平等に大和民族として和合してしまふものである」と諳つて居ますが、すべては渾然として統合されてしまつたのであり、現に朝鮮人臺灣人等が帝國臣民として「天皇陛下萬歲」を叫んで率先して聖戰に従ひつゝあるやうに、またやがて、マ、ハ、ハ人も、ヒ、ル、マ人も同じ氣持になつて日本文化に同化することでありませう。それは我が國の堅國理想即ち國家の本願たる「八絃爲字」の理想に共鳴し隨順するから、我が國としてそれらの諸民族を恰かも兄弟姉妹の如くに包容するのであります。その端的な表現は「天皇陛下萬歲」と叫ぶことであります。之れは「南無阿彌陀佛」と唱へることに依つてその氣持を端的に表現するのと同じ類型のものであります。

何と云つても自分の生命とするところの理想に共鳴して哭れるのは嬉しいです。況してその理想が正しいものである

り、それだけでなくは眞の生命を得ることが出来ないものであるに於いてをやでありまして、その意味から言へば、眞實の理想に共鳴し随順するのはむしろ當然なことであります。何と云つても眞實の理想は一つしかありません。そのたつた一つを宗教の上に見たのが阿彌陀佛の淨土でありますし、具體的な事實の上におのづから現はれたのが大日本帝國なのでありますから、世界の國々は何れも日本に來て學ばねばならず、また宗教の信仰に於ては法然上人の宗教に來なくてはならないのであります。

永遠の喜びに逢ひ得るものは八絃爲宇の日本盛國の誓願に共鳴する者に限られると同様に、そのもう一つの精神的觀喜は阿彌陀の本願に隨順し本願に乘托することではなれません。

然かもそれは法然上人の仰せられた通り唯だ「信心のふかき」に依るのみであります。

「信心の深き」とは信心の純一であり信行の單一であることとであります。あれにも手を出し、これにも手を出すと云ふやうな「普門」であつてはなりません。それでは八百屋であり萬屋であつて信仰としては低級であり淺薄であります。

また假りに純一であるやうに見へても、低級な類似宗教の如きは無論「深い信仰」とは言はれません。それは「迷信」に過ぎないからであります。それらは國憲にも一致しませんし、そんなのが盛んになれば亡國の頹廢を來たしませう。

勤勞を怠つて金儲けが出來、衛生をおろそかにして病氣を治すやうな宗教は、ユダヤ思想であり米英思想であつてこの際排除されなければならぬものであります。斷じて日本にはその存在を許してはならないのであります。それらは信仰と云つても皆な淺いものですから國憲にも合はず國家理想にも合ひません。

また念佛の信仰を持つて居ながら、他方に色々な宗教に手を出し首をつゝこむ人がありますが、それもまた「深い信念」とは云はれません。淺い信です。無論本願乘托の資格を有しません。

しかもさうした雜駁な考への持主では正確な國家理想を把握することも出来ないでせう。

されば淨土の信に徹するものこそ本當の人ともなり得られ、本當の國民ともなり得らるゝものであります。

編輯後記

◇農村に山村にたくましい増産の奮闘が續けられ、見事な成果があらがりました。人手の不足、肥料の不足、こうした根本的な障害を乗り越越してかち得た人々の顔が満足に輝いてゐます。

◇しかし他方には風水害のため、一年間に亘つて慈しみ育つたものを一朝にしてなくした所もありました。衷心より同情申し上げると同時にまた一年間の艱難を克服する御苦勞をお察し致します。

◇マレー方面を初め各戦線であつたれた拔群の功績に對して、感狀が授與されました。その何れも人業とは思へない位の行動をしてゐるものばかりです。

◇あの驚異的な大戦果をあげ得たうしろには、こうした言語を絶する御苦勞があつたわけです。しかし更にその他にも幾多の部隊、幾

萬の將兵が同じやうな辛苦をなめてゐることを銘記しなくてはなりません。

◇われわれは陸海軍の餘りに強いのに、信頼し切つてしまふところからつひ自分たちの受持つ防空に油斷が出發です。油斷があれば必ず隙があります。敵の飛行機は突如として現はれるのが特性であることを忘れてはなりません。

◇銃後のつとめは尚この外に、弾、大砲、軍艦、飛行機とあらゆる資材をいくらかでも造り出すことがあり、經濟界をますますしつかりさせることがあります。

◇二宮金次郎が武州鳩ヶ谷の近村にさしかゝつた際に、丁度一人の老婆がゐて、破れ草鞋を挿直し、何やら口の中で唱えてから田の中に投げすてるのを見ました。不思議に思つてわけを尋ねると、老婆のいふには、この草鞋は数日の間私の足を保護してくれたから、い

まそのお禮をのべてから捨てたのであるといつたといひます。

◇この恩を忘れぬ、もつたいない有難い氣持こそ大切なものです。

◇大東亞戦争の戦費は四百七十一億餘萬圓といひますが、日露戦争が十五億餘萬圓、日清戦争が二億圓の僅かな額で賄はれたことを思へば、段違ひの戦争であることが判ります。

◇ただし米國の戦費は五千億圓近くあると聞けば、まだ十分の一にも足りぬことを知ります。

◇吉田紘二郎先生はすつかり御元氣になられました。御指導を深謝いたします。

◇野生司香雪、堀公一、小林景造三氏から玉稿を頂き、特輯といたしました。

◇子母澤寛、八百谷順應兩氏から御多用中を御寄稿下され、特に十夜の話は從來餘り聞かなかつたお話です。(村瀬)

淨土 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和七年九月三日印刷
昭和七年十月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號印刷所

編輯兼發行人 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號印刷所

印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區飯町七(東京東一)印刷所 大日本印刷株式會社

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鎌倉會

東京市芝區芝公園印刷所

振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢
一ヶ年 (送料共)

御見御

腦の病・神經系統諸症・神經痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治效能

腦神經系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒキ）、兒麻痺（ツケ）、腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
神經性（耳病）、神經性（鼻病）、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
切、神經性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、諸大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

藥價			
六日	十日	廿日	卅日
貳圓	參圓	五圓	七圓

全國有名藥店、一流百貨店ニアリ
品切ノ節ハ直接本舖ヘ
御注文下サ

試供藥と
説明書を
進呈

京都伏見いなり山

謹製領藥元 願 成 閣

關西代理店 大阪 合資會社 丹平商會分店
關東代理店 東京 株式會社 丹平商會支店

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年九月廿日印刷本、昭和十七年十月一日發行

淨土 第八卷第十號

（停）定價金十二錢（送料）
滿鮮並等 外地定價金十三錢